

九州大学 経済学部 同窓会報

第60号

九州大学経済学部同窓会
事務局 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01750-6-21743

目次

Contents

平成28年度行事予定(総会のご案内) / 1

研究院長就任のご挨拶

磯谷 明德 / 2

事務局長挨拶

藤井 美男 / 3

支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 4

関西支部 事務局長 中野 光男(昭和50年卒) / 5

福岡支部 白水 清隆(昭和63年卒) / 6

事務局長 平井 彰(昭和55年卒) / 7

大分県支部 事務局長 工藤 順一(昭和55年卒) / 8

同窓生健筆模様

『日中歴史問題と解への道』 松岡 肇(昭和29年卒) / 8

画文集『北京の風景』の30年 中尾 太郎(昭和32年卒) / 10

秀村選三先生と守屋家の研究

江藤 彰彦(昭和50年卒・昭和52年博士入) / 12

原口頼雄著『被差別部落の歴史と生活文化』

九州部落史研究の先駆者・原口頼雄著作集成

西村 卓(昭和54年博士入) / 13

リレー随想

囲碁・野球、そして酒仙の大きさを慕うの記—北古賀先生に捧げる—

岩野 茂道(昭和34年博士入) / 15

九大の先生との出会いは伊万里の炭鉱、浜の塩買い

—北古賀勝幸先生の思い出— 山内 良一(昭和48年博士入) / 16

当時の講義風景のことなど

森 博美(昭和45年卒・昭和47年博士入) / 18

九経調創立70周年を迎えて

高木 直人(昭和57年卒・平成19年博士入) / 20

宇宙開発と経済工学

荒木 秀二(昭和62年卒) / 22

何か良い感じの人生

大塚 明子(平成16年卒) / 23

大学～社会人生活を振り返って

青柳 未央(平成16年卒・平成18年修士修了) / 24

人物往来～退官

アナログ人間に徹して

田北 廣道 / 26

九州大学経済学部を「卒業」するにあたって

稲富 信博 / 27

海と波と船

吉田 基樹 / 28

中国人民大学との交流の思い出

川波 洋一 / 28

同窓会会則 / 30

同窓会歴代会長 / 32

同窓会費納入のお願い / 32

平成28年度行事予定(総会のご案内)

平成28年度の全国・各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内いたします。

平成28年度 全国・福岡支部合同総会

日時 平成28年6月3日(金) 18時～

場所 ホテルニューオータニ博多
(福岡市中央区渡辺通1-1-2)
TEL (092) 714-1111)<お問い合わせ先> 福岡支部事務局 平井 彰
一般社団法人 九州経済連合会内
TEL (092) 761-4261
E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

平成28年度 東京支部総会

日時 平成28年7月7日(木) 18時～20時50分

場所 学士会館 210号室
(東京都千代田区神田錦町3-28)
TEL (03) 3292-5936)<お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行
株式会社オリエント総合研究所
TEL (03) 5877-5590 (ダイヤルイン)
FAX (03) 5877-5859
E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)
t29yoshimoto@aol.com(自宅)

平成28年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 平成28年11月開催予定

場所 未定

平成29年 関西支部総会

日時 平成29年2月18日(土) 15時～

場所 阪急ターミナルスクエア17(阪急17番街)
<お問い合わせ先> 関西支部事務局 中野 光男
富士精版印刷株式会社管理本部 気付
TEL (06) 6394-1182
E-mail m-nakano@fujiseihan.co.jp

研究院長としてのご挨拶



経済学研究院長
磯谷 明德氏

2015年4月から、経済学研究院・学府・学部の運営の舵取りを仰せつかり、1年が経とうとしています。昨年の同窓会報では、1991年10月に経済

学部に着任してから20年余りが経ち、長きにわたりお世話になってきた経済学部へのわずかばかりの恩返しのつもりで、微力ながら、研究院・学府・学部の将来に向けての貢献をすることができればと述べましたが、果たしてそのことを少しでも果たすことができたのか、はなはだ心許ないというのが正直な気持ちです。とはいえ、副研究院長をはじめとする4部門の部門長から構成される執行部の先生方に支えられながら、年度初めに予想した通りの2004年の国立大学法人化から10年を経過して、矢継ぎ早に課される様々な諸課題をどうにかこなしてきた1年間になりました。また、研究院長に就任をして、これまで参加することのなかった支部総会にお招きいただくことになり、これまで聞くことのなかった貴重なお話しや様々なご助言・ご意見を多数賜うことができました。また、そうした支部総会で、かつてのゼミ生（ゼミテン）に出会うことができ、現在の仕事の様子や家族のことなどを聞くことができるというのが、やはり教師冥利に尽きるものだと、そうした機会を与えていただいていることに感謝を申し上げたいと存じます。

さて、経済学研究院・学府・学部の現状ですが、それぞれの支部総会において繰り返し述べさせていただいておりますように、大きく変化しつつありますし、現に大きく変化しています。2年半後の2018年10月までに、文系4学部は、伊都キャンパスへの移転を完了します。現在、箱崎キャンパスに残る学部は、農学部と文系4学部の5学部のみとなりました。文系4学部の敷地内では、貴重な樹木や記念碑等の移植・移転の準備が今年度から始まっています。箱崎の理系キャンパスでは建物の取り壊しも進んで

おり、同窓会の皆様方が青春を謳歌したキャンパスは徐々にその姿を消しつつあります。同窓会の皆様には、博多にお出での際には、是非とも箱崎も訪れていただき、箱崎キャンパスの様子を記憶に留めていただければと存じます。一方、伊都キャンパスでは、文系地区でのランドマーク的な建物になる新中央図書館の地階部分が姿を現しつつあります。新中央図書館は第一期工事を今年度（2015年度）中に終え、その三分の一の面積での第一期開館が2016年10月に予定され、本研究院の研究棟建設は、2016年度の秋頃から始まる予定です。箱崎キャンパスの訪問とともに、時間にゆとりのある時には伊都キャンパスまで足をのばしていただければと存じます。こうした新キャンパスへの移転スケジュールが着々と進む中で、本研究院を長らく支えて下さった先生方が、今年度末には4名、来年度末には2名というように一挙に6名が退職をされます。おそらく伊都キャンパスに移転を完了する時の教員構成も今とは大きく変わることになると予想されます。

九州大学全体にとっても、伊都キャンパスへの全面移転が完了するこれからの2年半は、様々な改革が急ピッチで進められる期間になることは間違いありません。大学本部は、2015年10月に「九州大学アクションプラン2015」を公表し、文系部局に対しては「大学の使命や18歳人口減少社会到来を踏まえた人文社会科学分野等の再編成・機能強化」を求めています。これは、2015年6月8日に出された人文社会科学系や教員養成系の学部・大学院の廃止や社会的要請の高い分野への転換を求めた文部科学大臣の通達（これが、全国の国立大学に与えた衝撃については、東京大学前副学長の吉見俊哉氏による『「文系学部廃止」の衝撃』集英社新書、2016年を参照ください）に九州大学として呼応したものとイえます。

これに対しては、経済学研究院・学府・学部はこれまで次の2つを繰り返し述べてきました。本学の人文社会科学系学部は、それぞれの専門分野でこれまで培ってきた知的伝統と学問体系が全体として尊重され、かつ有効に活用されることではじめて、九州大学の総合大学としての力を発揮することができ、また新しいニーズにも柔軟に対応できるというのが、第1です。そして、本研究院・学府・学部は、経済学・

経営学という教育研究分野を通じて、経済社会の基盤となるソフトなインフラというべき多くの人材を育成し、わが国の経済社会の発展に貢献してきた。これは今後もそうした役割を果たしていくべき社会的な使命であることに変わりはない。もちろん社会のニーズは時代とともに変化する。本部局は、そうした社会のニーズの変化を教育・研究の現場で敏感にキャッチし、自己改革・自立的改革を積極的に進めていく組織であり続けるというのが、その第2です。そうした自己改革のあるべき姿とは、単なる数合わせ的な組織再編のようなものであってはならず、学部生・大学院生に対する魅力ある教育プログラムの提供とともに既存の学士・修士（博士）課程での教育力の強化をセットで考えるのが正攻法であるとも、繰り返し述べてきました。昨年と同窓会報でも書きました、2018年度にスタートさせることを決定した学士課程国際コース「グローバル・ディプロマプログラム（GProE）」は、そうした正攻法的なあり方の実現形の1つと考えています。この新たな学部教育プログラムであるGProEで育った学部生たちの多くが、より高い専門性と海外からの留学生たちと議

論・討論をできるだけ十分な外国語能力を備えて大学院に進学するならば、彼・彼女らが学府（大学院）における教育の国際化の中核的な存在になりえます。さらに、今年度末には、GProE等を通じてグローバル人材としての基礎を固めた日本人学生の受け皿となり、海外からのインバウンド需要を取り込むものとして、学府修士課程に、大学院レベルのグローバル・ビジネスサイエンス教育を実施する「グローバル・ビジネスサイエンスプログラム（GBSP）」を開設するという構想を明らかにしました。

伊都キャンパスへの全面移転までの経済学研究大学院・学府・学部は、学部には「グローバル・ディプロマプログラム（GProE）」を、大学院修士課程には「グローバル・ビジネスサイエンスプログラム（GBSP）」を開設することによって、その自立的な改革の実現に向けての試行（トライアル）と準備を着実に進める所存です。

同窓生の皆様には、そのプロセスを温かく見守っていただくとともに、時には厳しい叱正のお言葉を賜りますればと存じます。2016年度も、ご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。

平成28(2016)年度入学式 新入生347名 平成27(2015)年度卒業式 卒業生340名



同窓会事務局長
藤井 美男氏

平成28年4月7日(木)、伊都キャンパスの椎木講堂において平成28(2016)年度入学式が行われた後、4月11日(月)に箱崎キャンパス大講義室にて経済学部オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻（九大ビジネススクール、略称QBS）の入学式は、4月9日(土)に、箱崎キャンパスの視聴覚ホールで開催されました。入学者総数は347名で、内訳は経済学部経済・経営学科156名、経済工学科94名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻44名、産業マネジメント専攻53名です。経済学部オリエンテ-

ーションでは、貫正義同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

3月25日(金)には、福岡リーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は256名で、うち経済・経営学科161名、経済工学科95名です。経済学府修士課程修了生は84名で、うち経済工学専攻21名、経済システム専攻26名、産業マネジメント専攻37名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も、磯谷明德研究院長により行われました。以下が平成27年度の授与者です。

修士論文・プロジェクト論文

- | | |
|--------------|-------|
| (1) 経済工学専攻 | 徳富 智哉 |
| (2) 経済システム専攻 | 西嶋 大輔 |

(3) 産業マネジメント専攻
高橋 正輝
佐々木 彩
平川 恵里
山田 圭介

成績優秀者

(1) 経済・経営学科 徳田 真也
牧 和哉
(2) 経済工学科 中村 太亮

卒業式が伊都キャンパスの椎木講堂で行われるようになって3年目となりました。新しい時間帯で行う福岡リーセントホテルでの卒業祝賀会にも慣れ、各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力を仰いで、年度末・始の諸行事をつつがなく終えることができました。関係の皆様方には心より感謝申し上げます。

文系4学部の伊都キャンパスへの移転もあと2年

強となりました。箱崎文系キャンパスを象徴的する「楷の木」も、現時点で伊都へ移植する準備が整っております。

長年課題としております新入生の会費納入率向上は、昨年入学後の追加依頼を強化したところある程度の効果が見られました。2016年2月20日(土)に開催された関西支部での全国理事会でも、「同窓会報」をより読み易く興味深いものにすることで、会費納入率向上の一助としてはどうかという御意見を頂戴しております。同様に、各支部からより一層の御協力を頂くことで今後「同窓会報」の編集体制拡充を図る旨の御賛同も得ることができました。本年も貫正義会長のリーダーシップのもと、同窓会活動の充実を目指して参りますので、各支部同窓会を中心として、同窓生の皆様方へ一層の御協力をお願い申し上げます。申し上げ、新年度の御挨拶といたします。

支部だより

東京支部

1. 新卒歓迎会の企画会議の実施

東京支部では、関東地区に就職・進学される卒業生の歓迎会を毎年開催しています。

去る2月12日(金)午後7時30分～9時に、大坪事務局次長の経営する会社の事務所(五反田)で、若手理事及び事務局の7名の理事で検討しました。



【協議結果】

- 4月16日土曜日午後3時から2時間の予定で開催

する。二次会を企画する。

- 企画は、水田、竹之下両理事を中心に、昨年卒業の嶋田理事など過去出席者を中心に企画していき、必要の都度事務局で応援することとした。
- 参加人員40～50名を想定して、新卒者向けにゲストスピーカーを含め、先輩からのアドバイス等のフォローが十分可能なように、既卒者の参加も増やす。可能な限り、出席予定新卒者の所属企業に在籍する先輩に出席を働きかける。
- 新卒歓迎会に参加して参加を呼びかけ、Facebook等を活用する。

2. 東京支部理事会の開催

2月22日午後7時から神田神保町の学士会館303号室で本年度第1回目の理事会を開催しました。初井支部長多忙のため、秦・杉両副支部長ら11名にて協議しました。

理事会では、まず昨年の総会の振り返りを行った



後、4月16日に開催する新卒歓迎会の企画、本年度総会の企画内容などを協議しました。

また、新しい理事に若手を積極的に登用していくこととしました。

3. 九州大学経済学部 東京OBOG現役生 懇親会

2015年11月28日（土）午後7時から品川プリンスホテルにて「九州大学経済学部 東京OBOG現役生 懇親会」が開催されました（トップオブシナガワVIPルーム）。

鷺崎俊太郎准教授と鷺崎ゼミの現役生と関東地区に就職・進学している経済学部OBの交流会で、2014年から開催しています。



4. その他お知らせ

- (1) 東京支部では、平成22年9月より、Twitterを、平成23年秋からFacebookの利用を開始しています。皆様の「いいね！」やコメントなどよろしくお願ひします。
- (2) 理事会や同窓会関係行事の様子は、東京支部通信及びFacebookで記事と写真の掲載を行っております。<http://dousou.cocolog-nifty.com/>
なお、東京支部の活動状況は、<http://homepage1.nifty.com/dousou/>のトップページwhat's newからも見る事ができます。
- (3) 今年の七夕総会は、7月7日（木）午後6時から学士会館にて、総会を開催します。懇親会は、7時15分頃からになります。
同封の申込用紙に氏名等の必要事項をご記入のうえ、事務局宛にファクシミリまたは、eメールでお送りください。Facebook経由の申込みもできます。

【東京支部事務局長 吉元 利行 1978（昭和53）年卒】

関西支部

第41回関西支部総会が、平成27年度全国総会とともに、平成28年2月20日（土）午後3時より、阪急梅田駅に隣接する阪急ターミナルスクエア・17で開催されました。心配された雨も上がり、ご来賓の方も含め総勢約50名の参加を得て、盛大に行われました。



まず、第1部では、小森田支部長（昭和46年卒）の挨拶に続き、中野事務局長から平成27年度行事報告、平成28年度行事計画・役員案の提示、並びに平成27年度収支報告がなされ、原案通り承認されました。次に、磯谷経済学研究院長より大学の近況報告（平成30年秋には文系の箱崎キャンパスも伊都キャンパスに移転することなど）をお聞きし、法学部同窓会関西支部の徳永支部長より、NHK連続テレビ小説「あさが来た」にも登場した大阪の恩人・五代友厚（薩摩藩出身）にちなんだお話等をいただきました。



第2部の講演会では、元関西外国語大学教授の山道茂樹氏（昭和36年卒）が「ギリシャについて」、ご自分が三井物産時代アテネ事務所に赴任していた当時の体験談を踏まえ、ギリシャ人について、ギリシャの産業や歴史について、そして最近のギリシャの債務危機やユーロ離脱に関する考え方を披露していただきました。

第3部の懇親会は、清丸事務局長代理（平成2年卒）が進行係となり、太田副支部長（昭和46年卒）の開会挨拶に続き、兒玉、丑山、福留、堀江名誉教授ほか大学、本部、福岡支部、東京支部、法学部の

ご来賓の方々の紹介が行われた後、貫（ぬき）同窓会長による乾杯で、懇談会が始まりました。今年も九州大学から山縣理事のお祝いメッセージを添えたお酒の差し入れもあり、大いに盛り上がりました。午後4時30分から始まった懇親会もあっという間に予定の時刻が来て、歌唱担当の佐野顧問（昭和38年卒）、東京支部副支部長の杉哲男さん（昭和43年卒）、そして鈴木顧問（昭和33年卒）などコールアカデミーの方々を中心に、全員で学生歌を斉唱し、最高潮に達した中、今回出席された同窓生の中で最高齢の清水逸雄先輩（昭和29年卒）が中締め挨拶に立ち、名残惜しまれながらも散会となりました。



ところで、関西支部では平成28年度の行事として、3月、9月のゴルフ会をはじめ、5月21日の見学会（アサヒビール「大山崎山荘美術館」とサントリー山崎蒸留所）、11月12日の勉強会（講師は昭和29年卒、元大日本製薬常務取締役の清水逸雄氏）などを計画しています。同窓会の皆さん、ぜひ参加してみてください。参加を希望される方は、事務局まで遠慮なくご連絡下さい、お待ちしております。

【関西支部事務局長 中野 光男 1975（昭和50）年卒】

福岡支部

第59回交流ゴルフ会 11月29日（日）、伊都ゴルフ倶楽部

昭和63年卒の白水です。福岡への転勤と同時に幹事チームへの入会となりました。同窓会活動の更なる充実、会員間の一体感醸成を目指して頑張りますので、宜しくお願いします。

今回の交流ゴルフ会コンペには、前回は更に上回る55名のOB様・OG様にご参加いただきました。当日は、晩秋の肌寒い一日でしたが、老若男女14組による熱いコンペとなり、コースのあちらこちらか

ら歓声や悲鳴、うめき声が飛び交うほど盛り上がりました。

優勝されたのはグロス95、ネット68.6の田川真司さん（平成2卒）。前回に続き平成卒業生の優勝です。貫会長から優勝トロフィーを受け取られる際の初々しい笑顔が印象的でした。次回は昭和勢の巻き返しが期待されます。

「まだ若いモンには負けんたい！」ですよね。

ベストは道永さん。スコアは驚愕の75でした。会社から7名の中堅・若手を引き連れての参加だけに、気合が入っておられました。

今回も**豪華賞品***を多数提供いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。スコアとは関係なく受賞された方、おめでとうございます。

* **【貫会長】** 優勝トロフィー&商品券、（伊都GC 理事長賞）キャディバッグ

【木村さん】 いい肉の日（11/29）にちなんでアグー豚×2

【門野さん】 もっと腕を磨け！シミュレーションゴルフ プレー券×4

【紫尾さん】 可愛い原江里菜プロの刻印サイン入りパター

表彰式では、冒頭ご挨拶で貫会長から経済学部同窓会に対する深い思いを語っていただき、続いて参加者全員によるリレー式自己紹介となりました。ここで、某先輩の「最近の同窓会コンペには理系出身者が参加しているらしいな」との発言で火がついたのです。平成の卒業世代を中心に、私も私もと経済工学科卒の方々が名乗り出て、「我々のほうが遠路はるばる参加している」などの楽しい罵り合いとなりました。おかげで経済学部の同窓会とは言え、実は経済工学科卒が多数参加されていることが判明したのです。次回コンペでは、昭和卒と平成卒、文系（経済・経営卒）と理系（経済工学卒）による対決が楽しみです。

福岡にお住まいの方またはお勤めの方、こんな和



気あいの福岡支部同窓会ゴルフに参加されませんか。同窓会でゴルフをするなんて想像もしなかった学生時代に思いを馳せ、一緒に汗をかきましょう！

【白水 清隆 1988 (昭和63) 年卒】

サロン会

①忘年会

毎年この時期に開催している福岡支部恒例の忘年会。今回は平成27年12月4日(金)19時より、福岡ビル屋上で焼き牡蠣を味わえる「磯貝めんちゃんこのかき小屋」で開催し、22名の方にご参加いただきました。

ご参加いただいたのは市村昭三名誉教授と経済学研究院から小室理恵先生と潮崎智美先生をはじめ、原田準一氏(昭和26年卒)、藤原靖司氏(36年卒)、檀豊隆氏(40年卒)、鶴川洋氏(45年卒)、水上鎮真氏(47年卒)、工藤重之氏(52年卒)、嶋田正明氏(54年卒)、道長幸典氏(56年卒)、米村健史氏(56年卒)、大久保洋之氏(61年卒)、鎌田幸治氏(62年工学部・平成21年九大ビジネス・スクール卒)、岡村卓也氏(63年卒)、進研一氏(63年卒)、末次隆氏(平成2年卒)、重吉二憲氏(4年卒)、鶴田弘人氏(7年卒)、稲富勝則氏(10年卒)それに事務局の平井彰(昭和55年卒)です。

上記でご紹介したゴルフ会に多くの方々がご参加いただいたことで、特に若い方にサロン会の存在を知っていただき、若手の参加が多かったことが何よりの特記事項でした。

当日は、1テーブル4人ずつ、牡蠣焼き担当、取り分け担当、食べ方、フリードリンク給仕担当などに分かれ、テーブル毎によもやま話で交流が行われました。

②伊都キャンパス新亭々舎見学会

移転が完了し再開発が進む六本松の旧教養部。その敷地内にあった学生集会所「亭々舎」は、旧教養



部跡地の整備に伴い、一旦閉鎖、取り壊されました。

亭々舎は旧制福岡高校の遺構であって、新入生歓迎コンパをはじめ様々な機会に利用され、九大の移転に合わせて取り壊されることとなりました。そこで2009年の夏、工学部建築学科卒業生有志による社団法人「九大OB相談の研」が設立され、伊都新キャンパスに相応しい新たなコミュニティスペースを創造する計画が立ち上がりました。当支部でも、サロン会に同法人の青木直之代表理事(平成元年建築学科卒)を招いて、プロジェクトの概要を伺い、協力をしていくこととしておりましたが、このほど伊都キャンパスセンターゾーンに蘇りました。

当支部では、九大の各同窓会の先陣を切って、新亭々舎の見学会を予定しておりましたが、平成28年1月23日(土)、サロン会を「伊都キャンパス・新亭々舎見学会」として開催しました。

雪も舞う生憎の天気となりましたが、磯谷研究院長ご夫妻をはじめご夫人同伴を含め18名の方々にご参加いただきました。東京支部の杉哲男副支部長、同窓会本部事務局の藤原さんにもご参加いただきました。

当日は、先ず椎木講堂内の本格的なイタリアンレストラン、イトリー・イトでランチ。パスタやピザをメインに、ビュッフェスタイルのサラダやスープを味わいながらそれぞれが自己紹介。

続いて徒歩で新亭々舎に移動し、出来上がったばかりの新亭々舎を見学しました。細かい利用規則は未だ決まっておらず、私どもOBがどのように利用できるのか不明ですが、まとまって母校を訪れた際は交流を深める施設になることが期待されます。

今回は、より多くの方々のご参加を期待して土曜日の開催といたしましたが、気候的に寒く、思いのほか参加者が少なかったため、また見学会を企画したいと考えております。次回は、より多くの方々の



ご参加をお待ちしております。

【福岡支部事務局長 平井 彰 1980（昭和55）年卒】

大分県支部

大分県支部総会が、平成28年2月5日（金）18時30分、32名の会員の参加の下、大分駅南側に隣接するホルトホール大分で開催された。

総会は、ホルトホール大分2階のセミナールームで開催され、高山泰四郎支部長（昭39卒）の挨拶の後、議事に移り、前年度の経過報告・決算を承認して終了した。

その後「九州大学経済学部の現状」と題した本学提供のDVDを上映した。経済学部を卒業して多くの歳月が流れている参加者も多く、伊都キャンパスへの移転、学部の国際化への取り組み等母校の著しい変化に感慨深い様子でDVDに見入っていた。

最後に学生歌「松原に」を全員で合唱し、記念写真撮影後総会を終了した。

引き続きホルトホール大分3階のホルトガーデンで懇親会が開催され、貞包博幸副支部長（昭42卒）の挨拶・乾杯で参加者の交流が始まった。

今年は参加者32名の内7人（約22%）が平成以降

の卒業生であった。また、今年から卒業年次にこだわらない座席の配置としたため、昭和30年代、40年代、50年代卒業の会員と平成以降卒業の会員とが入り混じって同じテーブルを囲むことになったためか、これまでの懇親会とは一味違うなごやかな雰囲気の懇親会となった。

その後、今年初参加となった平成以降卒業の各会員によるスピーチが行われ、今後の継続参加を宣言すると、先輩達の喝采を浴びた。続いて昭和37年卒業の喜多川明純さん（コトブキヤ文具店）と昭和38年卒業の曾根崎和夫さん（大分県庁OB）から、後輩に託する温かいご挨拶をいただいた。

最後に、田中修二副支部長（昭46卒）による万歳三唱を行い、21時半過ぎ再会を期して閉会した。

【大分県支部事務局長 工藤 順一 1980（昭和55）年卒】



同窓生健筆模様

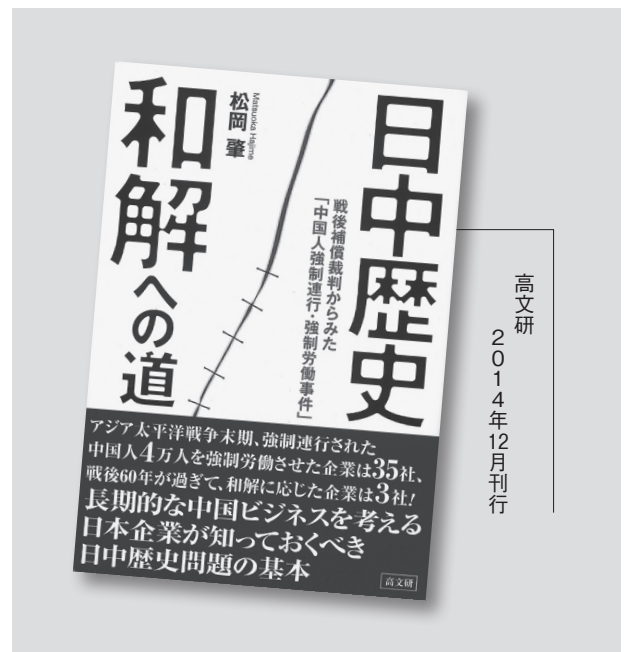
『日中歴史問題と和解への道』



新和総合法律事務所 弁護士
松岡 肇氏
1954（昭和29）年卒

私は1954年（昭和29年）の経済学部卒業です。この原稿の依頼を受けた昨年2015年は戦後70年、終戦の時私は14歳でした。現在84歳になります。

戦時中の米軍機による機銃掃射や福岡大空襲を経験したほか、敗戦の年の1945年4月から学徒動員で福岡市内電車の運転に従事しました。中学二年生の



高文研
2014年12月刊行

時です。去年は戦後70年というので福岡ではテレビや新聞で話題になりました。子供にとってそれは技

術的にも体力的にも大変な仕事でしたが、反面あこがれの電車を子供なのに一人で運転できると大変喜んだ友人もいました。焼け野が原の福岡市内を唯一市民の足である電車を運転したのです。九大では向坂逸郎先生や高橋正雄先生、正田誠一先生らの指導を受けてマルクス経済学の理解に努力しました。

そんな経験を経た私は、卒業後福岡銀行に入り、銀行業務に従事する傍ら労働運動に関わり、二度と戦争をしてはいけないという固い決意の下に、全国金融労働運動の展開と発展に力を尽くしました。こうして私は20年近く銀行労働者を経験した後、人生の方向転換を求めて司法試験に挑戦し、50歳で合格し52歳で弁護士になりました。以来労働者の権利や人権を守る闘いを中心に各種の裁判に関わりましたが、中でも炭鉱夫じん肺訴訟やトンネルじん肺訴訟などのほか、中国人強制連行・強制労働事件に取り組んできました。2014年の暮れ、私は「日中歴史和解への道～戦後補償裁判からみた『中国人強制連行・強制労働事件』」という本を出しました（高文研）。この事件の全容を、戦争を知らない世代に伝えるために書いたものです。

この事件は、15年戦争と言われる中国侵略戦争の末期、1943年4月から45年5月までの2年間に、日本の戦時労働力不足を補うために、占領下の中国各地から38,935人の中国人男子（劳工）を強制的に日本に連れて来て、北海道から九州までの炭鉱や金属鉱山、土建業や造船、港湾荷役などの重筋労働に従事させたものです（35社、135事業場）。年齢は11歳から78歳まで、連行の仕方は日本軍による手当たり次第の拉致・連行であり、労働の実態は奴隷労働そのものでした。短い人で3ヶ月、長い人は2年以上働かされて賃金は支払われず、衣食住も大変苛酷なものでした。それは死亡数を見れば明らかです。死亡者数は全体で6,830人、死亡率は17.5%です。半数以上が死亡した事業場もあります。大変な長時間労働、劣悪な衣食住、休日も休憩もない文字通りの「人として扱われず、牛馬のようだった」（劳工の訴え）という労働実態でした。

日本での裁判は1995年から起こっています。全国の12地裁で15の裁判が行われましたが、勝訴、敗訴を経ながら最高裁で全て敗訴になりました（一部企業との間で和解した事例もあります）。判決理由は色々ありますが、最高裁は、2007年4月、西松建設を被告とする広島安野事業場事件において、1972年の日中共同声明で中国が請求権を放棄したという理由で請求を退けました（この解釈には争いがありま

す）。併しその最高裁が、敗訴判決文の後に、この苛酷な歴史的事実を認めた上で「個人には請求する権利はあるのだから、今後当事者（原告と企業及び日本国）間で救済に向けた努力をすることを期待する」という付言（意見）を付けたのです。このことは、最高裁が、法律的にはともかく、この事件が解決すべき事案であることを認め、当事者間での解決を求めたことを意味します（西松建設はその後、信濃川事業場を含む全劳工との間で和解しました）。この最高裁の敗訴判決に中国の人たちは納得していません。謝罪と賠償を求める劳工たちの要求は更に激しくなっています。当然です。戦後70年、生存する劳工は僅かになり、運動の中心は子供たちから孫たちに移っています。日中間の問題が厳しい現在、日本の弁護団は和解による全面解決を目指して、企業や国と交渉を続けてきました。戦後補償の裁判は、全て国が被告ですが、この事件では例外を除いて国と企業が被告となっています。しかし企業の中には戦後なくなった企業があります。そこで働いた劳工は1万人以上と言われ、企業との和解だけではこの劳工たちは救われません。どうしても国がかかわる必要があります。

国は裁判の時から全て拒否、否定です。連行の事実さえ認めようとしませんでした。しかしこの事件については、戦後、連合国や中国からの責任追及を恐れた国が作成した二つの文書があります。135の事業場（企業）に作らせた「事業場報告書」とこの資料を基に国が作った「外務省報告書」です。国は何れの文書も秘匿し続けましたが、1993年にNHKの取材から、二つの文書の存在が明らかになりました。こうして全ての裁判所がこの歴史的事実については認めることになりました。問題の慰安婦事件と違ってこの事件については、国もその事実自体は争えないのです。

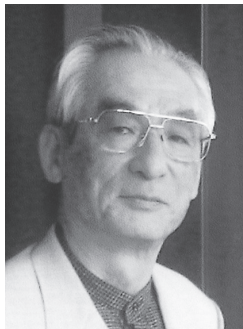
日本での裁判は全て終了しましたが、中国では新たに裁判が起こっています。劳工や遺族たちの要求は続きます。このままでは日中間の戦後和解の真の実現は困難だと思います。私たち弁護団は、国と企業が、戦時中に日本が犯した強制連行・強制労働の事実を素直に認め、劳工たちに心から謝罪し、然るべき謝罪金を全ての劳工（またはその遺族）に支払うことで解決を図るべきだと思います。それを契機として、その他の戦後補償問題も含めて解決を図り、日中間の真の和解の実現に寄与できればと考えてこの本を出版しました。しかし和解の実現は容易ではありません。企業は法的安定性のために国の関与を

求めますが、国は全て拒否します。企業だけとの交渉も難航の連続です。アジアの平和のためにも、中国や韓国との歴史問題を巡る真の和解の実現が何よりも必要です。戦争を知っている私たちの同窓生は、

現在の政治的立場を超えて「戦争だけはやってはいけない」という点で一致します。

この思いを実現するためにも、私たち弁護団の考えを広く伝えたいと思っています。

画文集『北京の風景』の30年



中尾 太郎氏
1957(昭和32)年卒

卒業後、半世紀を経て今八十路、本号に嬉しいことを書くことができたのは幸いです。

出光に在職中、私は北京駐在の思い出を画文集『北京の風景』中尾太郎・著(丸ノ内出版)として出版(1987年)したことがありました。急ぎ近代化する北京でしたが、消え去るかも知れない路地や横丁・胡同の古い風情に惹かれて、私は休日スケッチに出掛け、メモを残して、帰国後、これをまとめたのでした。

この画文集『北京の風景』が、昨年、実に30年近い歳月を経て、北京で刊行の日本語月刊誌『人民中国』の1月号と2月号(2015年)に前編・後編6ページにわたり連載紹介されたことを知りました。思いがけないことでした。

紹介者は中国のジャーナリスト・李順然さん、私の存じあげない方でした。李さんは私と<同い歳>の83歳ですと手紙をいただきましたが、同じ思いがあったのでしょうか、古都・北京への深い愛情が、素的な日本語で語られています。いくつか拾ってみましょう。

李さんは「北京秋天。天安門広場に立って、十月、秋たけなわな蒼天を仰ぐと空の色は天に向かっていよいよ深い」という画文集の文章を引用して、北京の秋の素晴らしさを語ります。また、胡同スケッチのどの絵も緑豊かな樹木が背景に描かれているのに注目し、これは北京が「森の都」と呼ばれる証だと驚きます。故宮の周辺だけでなく、路地や横丁・胡同にも緑の樹木が豊かなのは、実は北京っ子には古くから植樹造林へ愛着があったからだ指摘します。

画文集の絵にはすべて人物が省略されていて、そこには空き地や空間があり、「死胡同」と呼ばれる



行き止まりの路地もあって、結果として静かな家並の胡同が描かれている。「爺々」とか「老爺」とスケッチをする著者に敬称で呼びかける子供達の会話が載っていて、人々の日常を想像することができる。そんな北京も速いテンポで変わっているが、北京っ子の古都を愛する知恵と力、美意識が「隠れた秩序」となって街づくりをすすめて見守っている、李さんが古都「森の都」の未来に大きな期待を寄せるのはこのことだと述べています。

画文集の「人の輪を広げたい」との願いも紹介して、思いは同じです、と李さんは今回『人民中国』に掲載されたことに期待しています。

昨今は難題ばかりの日中関係にあって、実に30年

近い歳月を経て蘇った一筋の細い糸ですが、これが私には何か好ましい一筋の糸に思えてきます。嬉しいことです。そして、これには予期せぬ嬉しい「続き」があったのです。

2015年10月、1冊の月刊誌が届きました。思いがけず日本古典文学者で作家の竹西寛子さんからで、〈詩と批評〉の月刊誌『ユリイカ』10月号でした。耳目抄「二通の手紙」と題した竹西寛子さんの6ページのエッセイが載っていて、読みすすむ中、この画文集に戴いた、まことに希有なご縁の、ながい歳月が蘇りました。28年前のことです。〈これは、もしや、そうではないですか?〉と、職場の女性に当時教えられたことからでした。

「耳目抄「二通の手紙」・・・(略)・・・旅から帰って、中国に関わる書物であまり専門的でないもの、私にも分かるようなものを勢い次々に読むようになった。その中には今以て格別の愛着でつながっている一冊の画文集がある。『北京の風景』。・・・(略)・・・淡彩だけの、人物の描かれていない、北京の町家のスケッチ集という。偶然に知ったテレビでの新刊情報だけがたよりであったが、それだけで充分惹かれるものがあって私は迷わず購めた。(略)・・・もしも自分が中国の土を踏んでいなければ、中国の風や水を知らなければ、この画文集への期待は違っていたかもしれない。届いた本の頁をゆっくり起こしながら、私は自分の直感が間違っていなかったことに安堵し、北京の路地や横丁の町家の夜の静寂を運んでくる作品に見入った。静寂はあらゆる物音をのむ。物音は静寂を拒む。・・・(略)・・・

昭和六十三(1988)年、私は見覚えのない筆跡の一通の封書を受け取った。ゆっくりと裏に返し、差出しの人を確かめてはとなった。何と「北京の風景子」とある。友人に教えられた文章で、はじめて画文集が取り上げられているのを知り、それを読んだ「北京の風景子」は昨夜静かに感激したという丁寧なお礼状であった。

昭和六十三年は、この画文集を購めた翌年である。当時私は淡交社の月刊雑誌の『なごみ』に、「水の断章」という連載を発表していた。式子内親王のお歌にふれた「雪の玉水」の章で、私は抑え難く『北京の風景』が運んでくる北京の町家の夜の静寂について記していた。静寂はあらゆる物音をのむ。物音は静寂を拒む。それ故私は静寂を好む、と。

この手紙を受け取ってから二十七年が過ぎた。さきごろ、私は又しても思いがけず、画文集の著者からの二度目の手紙にはとなった。今度は本名で、

複数のコピーと一緒にあった。・・・(略)・・・著者にも思いがけず『画文集 北京の風景』が、実に二十八年の歳月を経て、北京で刊行の日本語月刊誌『人民中国』の本年一、二月号に紹介されたので、コピーをお送りしますとある。・・・(略)・・・『昨今、難題ばかりの日中関係にあって、三〇年近い歳月を経て蘇った一筋の細い糸』を好ましく思う画文集の著者のよろこびを、私も又素直によろこびとした。良書の歳月、良書との思惑を超えた縁に、希望を抱く。』と、結ばれていました。嬉しいことです。

時を経て、こうした健やかな交わりをいただけたこと、それも真に稀なるご縁をいただけてのことで、恐縮ながら、お陰さまと、言うべきでしょう。李さんと私は〈同い歳〉、竹西さんは4歳上の方、共にグランド・シニアです。有り難い・ことです

皆様、思いはいろいろありましょう。それでも、やはり「希望を抱く」、と言い交わしたいものです。どうか皆様ご健勝に。

追記 私には画文集の後に、出光美術館在勤時の成果2冊の著書と訳書があります。

『アメリカ・ヨーロッパ美術館紀行』(1991)平凡社
『大英博物館の舞台裏』訳書(1994)平凡社
(経済とは)畑違いの実も実る時はあるのでしょうか。折々が思い出されます。



秀村選三先生と守屋家の研究



久留米大学経済学部教授

江藤 彰彦氏

1975(昭和50)年卒

1977(昭和52)年博士入

秀村選三先生は1951年以来、1986年に退職されるまで、35年間経済学部で研究と教育に当たられた。じかに講義を聞いた世代は50代以上ということになる。しかし、同窓会にもしばしば出席され、本会報に寄稿もなさっているの、若い世代でもご存じの方は少なくないだろう。

専門は江戸時代の社会経済史、なかでも農村奉公人の研究がその中心をなす。「家」を社会制度の基本単位とした江戸時代において、「家」の労働組織に組み込まれた奉公人のありようを明らかにしてこられた。近代的な賃金労働者のルーツを求めるといよりは、「家」という場に埋め込まれた労働のあり方や労働組織を探ることに力点は置かれている。

同時に、旧家などに代々伝えられてきた古文書の発掘・保存にも並々ならぬ力を注がれてきた。先生によって紙魚やネズミの攻撃から救い出され、あるいは湮滅の危機をまぬがれ、現在に伝わる史料は膨大な量にのぼる。寄贈・寄託されたものも多く、敗戦後、1960年代までに九州大学が受け入れた史料のかなりの部分に、先生は関わっておられたのではないだろうか。作道洋太郎先生(大阪大学名誉教授)に昔話をお聞きした際には、「いつ訪ねて行っても、秀村さんの机のまわりは古文書があふれていて、しかもそれが行くたびに違う文書なんです」とおっしゃっておられた。

刊行に関わられた論文集・史料集・史料目録なども、これまた膨大である。論文集では第一線の薩摩藩研究者を網羅した『薩摩藩の基礎構造』・『薩摩藩の構造と展開』、石炭産業史の若手研究者をデビューさせた『エネルギーと経済発展』、雑誌では『エネルギー史研究』や『西南地域史研究』、史料集・史料目録では1950年代半ばからの『九州史料叢書』・『九州近代史料叢書』に始まり、『筑豊石炭産業史年表』・『九州石炭産業資料目録』・『博多津要録』などなど。そして福岡県地域史研究所を創設して、『福岡県史』(近世・近代)の編纂代表もつとめられた。



これほど多彩な研究活動を繰り広げながら、ご自身の学位論文はずっと刊行されないままになっていた。大学紛争(学生にとっては闘争)や、地域の人々と連携した大学外での活動の拡大が一因だったと思われる。また、事実の詰め・文章の彫琢に最後までこだわられる先生の性格もあっただろう。単独の著書が刊行されたのは2004年、先生81歳の時であった。

『幕末期薩摩藩の農業と社会 - 大隅国高山郷士守屋家をめぐって -』(創文社)がそれである。大隅国肝属郡高山郷(現、鹿児島県肝付町高山)守屋家に残された日記や農事記録を基本史料として、幕末期薩摩藩領の農村社会や農業の姿を描き出したもので、全体は、薩摩藩を他地域との比較のなかで位置づけようとする第1編「序論」、第2編「守屋家の農業経営と労働組織」、第3編「守屋家をめぐる社会関係」、第4編「高山郷における諸問題」の4編・15章から構成されている。

刊行の翌年、同書は江戸時代についての優れた研究書に与えられる徳川賞(第3回)を受賞。そして2007年には、日本学士院賞、およびその中で特に優れた研究に合わせて贈られる恩賜賞を受賞した。

なにがさほどに評価されたのか。日本学士院の授賞理由は以下の通りである。

本書は「上級郷士の一つである守屋家を中心に、当時の郷村や家の生活の実態を、いわば微視的かつ総合的に考察」し、「一つの郷、一つの家の姿を、いわばその内部構造に即して克明に描く」ことを通じて、「薩摩藩領農村の具体的

な様相を解明するための確実な基礎を提供し、「薩摩藩領を解明するための基点」としようとしたもので、薩摩藩研究のみならず、日本の社会構造全体の理解にかかわる多くの知見をもたらし、学界に大きく寄与した。

現地を歩きながら一つの村を徹底して研究する、その地域の史料を整理・保存し、基本史料を刊行して研究基盤を整備する、そうした研究姿勢から生まれた、今後の研究の確実な基点となるモノグラフとして高く評価されたのである。私にはこれ以上の学術的評価を付け加える力はない。

ただ、守屋家の研究を通じて強く教えられる点が二つある。

一つは、先生が地元の方々とのつながりを大事にしてこられた、それが守屋家の研究を高く評価される内容のものにした点である。これは、日本学士院の審査要旨にも記されている。「単独の外来者として、現地をよく踏査し、またこの地域に居住する多くの人々に接して、聞き取りをしたり、宿泊の便宜を与えられたりするなど、密接な交流があった」と。審査者の眼識を示す、授賞理由としては破格の特記といえよう。史料を読むだけでは研究はできないのだ、ということである。

もう一つは、九州大学法文学部の最良の部分の先生が体現されている点である。敗戦により海軍から復員した後、転学した九州大学法文学部で、先生は恩師として敬愛し続けた宮本又次先生に出会われる。さらに金田平一郎先生からは法制史を、竹内理三先生からは史料学を、喜多野清一先生からは農村社会学を吸収されて、研究の枠組みを広げていかれた。狭い専門領域から関心のある部分だけを切り取るのではなく、「一つの郷、一つの家の姿を、いわばその内部構造に即して克明に描く」作業は、そうした間口の広さなしにできるものではない、ということである。

先生の「健筆」は、澄子夫人が逝去されてからも、学問と戦死者たちへの思いを支えに、多くの方々の協力を得て現在も続いている。また、受賞から10年近くになるというのに、本会報でその内容を同窓生諸士に紹介しようと企てる具眼の編集士にも恵まれていらっしやる。唯一の不運は、その健筆ぶりを紹介する役割が、「不健筆」の私にまわってしまったこと。しかし、世の中すべてがうまくゆくわけではない。時に起る小さな不運の一つと、先生にも、編集士にも勘弁していただく以外にない。

原口穎雄著

『被差別部落の歴史と生活文化』 九州部落史研究の先駆者・原口穎雄著作集成



同志社大学経済学部教授

西村 卓氏

1979(昭和54)年博士入

原口氏のこの『著作集成』は、全体で500頁ほどの大部のものであるが、彼の生涯の学術的業績だけを切り出したいわゆる「学術書」というものとはその体裁と内容が、ある種異なったものになっている。そのことが、むしろ原口氏の人となりを映し出すのに最適だったのだと、全体を読み通して感じた。

本書は三部から構成されている。

第一部「学術論文・史料解題」

第1章「近世福岡藩における被差別部落の身分支



配と生業」

第2章「『解放令』と堀口村における居住地域拡張の闘い」

第3章「福岡連隊事件長崎控訴院公判調書」

第4章「井元麟之講演録『福岡連隊事件秘話』解説」
 第5章「全九州水平社機関紙『水平月報』（復刻版）
 解題」

第二部「基調報告・講演記録」

第1章第1節「部落解放運動、解放（同和）教育」
 第1章第2節「行事に終わらせることなく、日常
 的な取り組みを」

第2章「部落史を問い直す歴史学習のあり方——
 部落の歴史とは何か——」

第3章「部落解放運動がめざしてきたもの——福
 岡連隊事件と井元麟之氏の歩みを中心と
 して——」

第4章「部落差別と宗教」

第5章「被差別部落の文化、その基底をさぐる」

第6章「『菜の花』の世界について——被差別部
 落の民話を考える——」

第三部「事典・初期論考・障がい者解放・詩・エッセイ」

第1章「事典項目」

第2章「初期論考・部落問題について——日本資
 本主義と部落問題——」

第3章「障がい者解放・詩」

第4章「エッセイ」

さらに口絵写真が4ページ、原口氏を知る方々が、序文や推薦文、刊行の辞、あとがき、各部の解説をよせ、巻末には原口氏の丁寧な著作・業績年表が添えられている。

著作一つひとつに対する意義と評価は、本書のなかで、簡潔で適切な解説が収録されており、逐一屋上屋を重ねるつもりはない。しかし、第一部に収録された論文や、第二部の講演記録などで、原口氏が故松崎武俊氏の提起された「差別と貧困の部落史」から「生産と労働の部落史」への転換という問題に共感し、そのことを彼の部落解放史の軸に据えようとしたことについて、私の思う所を述べておきたい。

私は、現在の勤務校において、教職課程の必修科目として、長年「同和教育論」、「人権教育論」を担当してきた。テーマは「^{かわた}皮多」の生活史からみた被差別部落の歴史」とし、福岡藩の近世から近代にいたる「皮多」と呼称された人々の生活を、行刑、斃牛馬処理、農業・諸業（革細工など）といった側面から立体的に説明しながら、特に、生活する上で農業の比重が高まるなかで、皮多身分から百姓身分への転換=脱賤化への願いを、例えば、年貢を誰よりも早く納めようとする「一番皆済」の動きなどを通して、学生たちに伝えてきた。



学生たちは、この年貢の「一番皆済」という彼らの行為が、領主側の強制により渋々ながら対応したものでなく、皮多自らの側からの強い能動的意志によってなされたこと、そこに「差別と貧困」のなかで追いやられる皮多の姿でなく、「労働と生産」にたくましく立ち向かう皮多の姿を見て取るのである。

少なくない受講生たちは、課題のレポートのなかで、皮多のそういった営みに共感を示し、いままで教条的に声高に「差別はいけない！」と言われ続けてきた被差別部落観からの脱却を書き綴ってくれる。私は、それを目の当たりにして、丁寧な史料の掘り起こしにより、「史実と授業の結合」が、人を変えていくことの力強さを感じている。そして、原口氏はそのことを研究者として、教育者として、そして部落解放運動の実践者として、強く希求したのであろう。

本書の序文や解説を書かれている方々もふれられているように、彼は二つの「かせ」を身につけながら、60余年の人生を走りきった。

私の大学院生時代に部落史研究会の事務局で、彼と雑談をしていた。その時、彼が私に、なぜかはにかみながらぼつねんとつぶやいた。

「西村さん、僕ねえ、夢のなかでは両足で走っているのですよ」。

両足に補助具をつけ、車を運転する彼、車を離れた時は、松葉づえ姿の彼。その彼からそんな言葉を聞いた時、嬉しいと言うか、ある種感動に似た気持ちを持ったことを鮮明に覚えている。重松清の『きよしこ』という小説を読んでいて、吃音の主人公が「きよしこ」と話す時にはよどみなく言葉が出るという場面に出くわした時、その時の気持ちが真っ先によみがえった。

いま思うに、彼の人生はこの二つの「かせ」から自らを解き放つ闘いだったのだろう。その「かせ」

を生み出してきた歴史や政治、社会や文化との、さらに彼の肉体的な自由を奪った「障がい」との。

最後に原口氏に話しかけることを許していただきたい。

「^{えいゆう}穎雄さん、この世でやり残したことは僕たちが継いでいきます。いまはゆっくり休んでください。そして、いつか春風のさわやかにふく草原を、一緒に走りましょう。待っていてください。」

リレー随想

囲碁・野球、そして酒仙の 大きさを慕うの記

—北古賀先生に捧げる—



学校法人熊本学園前理事長

岩野 茂道氏

1959(昭和34)年博士入

およそ50年位前の話になるが、当時の熊本商科大学の1号館を

入るとすぐ左手に宿直室があった。警護や清掃などもすべて職員の仕事で、out-sourcingというしゃれた産業もなかった時代の事、宿直室は昼休み時のたまり場であり、教職員の数少ない交流の場でもあった。そこで「アイタ！」とか、「勝ったぞ！」とか大きな声でわめく碁盤を囲む人々の輪の中心には、いつも北古賀先生がいた。

碁のタイプは基礎をがっちり固める本格派だったが、おおらかな性格がそうさせるのか、中盤のねじり合いでは脇が甘いところがあり。そこが付け目で時に勝たせてもらった記憶がある。

北古賀先生と言えば草野球を外すわけにはいかない。熊本大学と当時の熊本商科大学の教員対抗試合は、現在もなお続けられている親善行事だが、当方の自他ともに許すエースは北古賀選手。キャッチャーは手をあげる者が少なく、時々、私が相方をさせられた。学者にしては珍しくグローブのような大きな右手で投げる球のスピードはそれほどでもなかったが、ずしりとひびく重たい球種だったから、文弱の熊大組を結構悩ませていた記憶がある。

勝っても負けても終われば敵味方一緒に居酒屋に



故 北古賀勝幸先生

直行、準備は出来ていた。こっちの方が双方の目的でもあった。飲めば斗酒なお辞せずの人、盃（さかずき）は不要、一合コップで一気に半分という勢いだから、いつも裏方は大変だった。

酔っても頭はさほど乱れないが、声だけは大きく議論に付き合うのは気骨が折れた。経済成長をひた走っていた1960～80年代の事、「景気の循環」はあっても『恐慌』現象は説明できないのでは、と余計なことを言ったばかりに、先生を本気で怒らせたことも今となっては懐かしい思い出である。

2007-9年に世界を襲った“リーマン・ショック”（金融恐慌）をどのように解いたらよいか。ゆっくり議論する間もあらばこそ、少子化の中の大学難題を救うべく理事長のバトンを託され、おろおろしたまま、先生の病状の進行を知らされたのは、2013年秋深くなってからであった。

自らの病はさておいて、足を悪くされた康子夫人を気遣い、日頃慣れない買い物や身の回りの始末をこなされていたその後の数か月の心情を察すると、今もお心痛む思いを抑えきれない。

73年の輝かしい歴史と伝統を今に継がれた学園の

リーダーとしてのみならず、北古賀勝幸先生の学風と薫陶を受けた教え子たちは、手作りで編み出した「追悼文集」に、思い出記を書かせてもらったことに感謝しています。北古賀さん、康子夫人もすっかり元気に回復されましたよ。ご安心ください。

【編集部註記】

逢坂充先生より届けられた『北古賀勝幸先生追悼文集』（発行 熊本商科大学・熊本学園大学・学生商経学会・経済学研究会 O B 会、2015年7月刊）より再録いたしました。

リレー随想

九大の先生との出会いは 伊万里の炭鉱、浜の塩買い —北古賀勝幸先生の思い出—



熊本学園大学経済学部教授

山内 良一氏

1973(昭和48)年博士入

学校法人熊本学園の元理事長、北古賀勝幸先生が亡くなられて2年が過ぎようとしている。お

元気ならば卒寿を越えたお歳である。

先生は長崎県松浦市のお生まれ。ご実家は金物商品を手広く商っておられたとか。同志社専門学校(旧制)のときに徴兵され、終戦を三重県鈴鹿航空隊で迎えられた。戦後復員して佐賀県伊万里市の炭鉱会社に勤務。労働組合の委員長を任されるなど、当時から人望も厚く従業員の労働環境改善に取り組みられたとお聴きしている。

会社に在職中、都留大治郎先生(故人)、中楯興先生(故人)らとの出会いがきっかけとなり経済学を探究すべく、会社を退社して九州大学経済学部へ進学された。

中楯興先生のご葬儀(2008年)における「弔辞」の中で、先生は当時の思い出を次のように述べておられる(紙幅の関係で、所々の省略をお許しいただきたい)。

「先生と知り合ったのは戦後まもなくの事だったと思います。うちの前を下士官の服を着て何遍か通って行かれる凛とした青年紳士をみて、一体あの

人は誰かというような噂をしていたわけですが、やがて九州大学大学院特別研究生であるということ、名前は中楯興ということを知ったわけでございます。うちでは、中楯さんのことを興さんと呼んでおりました。…中楯さんは僕のことを勝っちゃんと言う風に、ずっとその調子で呼び続けられてこれたかと思っております。

私の町は中小炭鉱に取り囲まれた寒村でしたけれども、戦後経済復興の過程で石炭産業も活気を呈するに至り、私は復員してからその炭鉱に勤めておりましたが、先生のお父さんが同じ炭鉱に勤められていたかと思えます。お父さんはやがて町長となられ、さらに初代の市長も勤められましたが、仲人をお願いした記憶が今も新たでございます。先生のお宅には度々おじゃまして、あの蔵書の質と量とに驚いた次第です。世界史や哲学の話などお伺いしましたが、経済については、講座派と労農派と、まあ戦前の経済学もずいぶん変わってきたのだなというような感じを強く持った次第です。やがて私は会社を去って九大を受験し幸いパス致しましたけれども、先生の大変篤いご指導のおかげだと思っております。

炭鉱の方は当然退職致しましたが、その炭鉱に在職中のこと、町の海岸には大量の石炭が流れていた所があって、人々は波に打ち寄せられた石炭を集めて、製塩業を営み始めました。その時、都留大治郎先生が塩を買いにおみえになって 都留先生も知ることができました。…

炭鉱にいる頃は組合の書記長をしておりまして、組合で九大の先生をお呼びすると言うことで、お見えになったのが吉村正晴先生でございました。幸いと申しますか、病気にかかれ、しばらくわが町に滞在されたことで吉村先生を知ることができました。

九大に入って、研究室は吉村先生のところに残ることになりました。本来、世界経済論の勉強をするはずでしたが、1929年恐慌と戦争ということに関心を惹かれて、恐慌論に進んだ訳でございます。恐慌論だけに懸命でした。ようやく助手が終わる頃に、一本の論文を書き上げて、熊本商科大学、現在の熊本学園大学に奉職することになった訳です。私はその後五十数年を熊本で過ごすことになりましたが、そうした生活を送ることができたのも、先生にまた感謝をしているところでございます。

年数は流れますが、昭和六十年代に入りまして、本学で大学院設置の動きが出て参ります。当時退職されておりました中楯先生をその大学院にお呼びしたらというようなことがあって、専任教授として先生

がお見えになってまた一緒に生活できたこと、本当に幸せであったとっております。…」(下略)

ここで、北古賀先生と私自身とのことを少し述べさせて頂きたい。先生は、熊本の地で55年余りにわたり研究者・学者としてはもちろん、公人としても大学改革に全身をもって尽された。私自身は赴任以来36年にわたりご指導と親交をいただいたのだが、その思い出は語りつくせないほどである。いま感謝の気持ちとともに、その一端を語りたい。

先生のお名前に初めて接したのは、九大大学院で博士課程に進んだ頃、有斐閣から刊行された『新マルクス経済学講座・全6巻』(1972年)に収められた先生の論文「国家独占資本主義と恐慌」である。学会で大きな論争となっていた分野で、「北古賀理論」として名声が全国に知られた頃でもある。当時、九大の非常勤講師としても教えておられ、その折に、先生の兄貴分であり私の恩師でもある都留大治郎先生の研究室にも立ち寄られ、私も同席の機会があった。自他共に認める「左党」のお二人は、授業のあとに天神町の屋台が並ぶ界隈をゆったりと回遊されていたようである。

もう38年前のことであるが、本学の採用内定をいただいた折りに、都留先生から「北古賀君、岩野君(前理事長)、中山君(商業政策担当、故人)には挨拶しておくように」と言われ、早速に先生の研究室に伺った。今でもよく覚えているのだが、先生の質問(というか採用条件?)は「酒は飲めるか? 野球はできるか?」と。「スポーツはとんとダメですが、お酒は好きです」と答えると、「そうか」とニコリされた。以来36年間、しばしば先生のお酒にご相伴することになる。

先生は、公私ともに激務のなかでも学生や私ら教職員ともよく酒を酌み交わし、ご自宅にお伺いすることもあった。奥様にはずいぶんご迷惑をおかけしたと思う。先生の好きな酒は日本酒の熱燗。飲みっぷりも豪快であったが、時に飲み癖の悪そうな人がいても、いつのまにか陥落させて愉快的雰囲気で飲みこんでしまうという、まさに酒を「潤滑油」として使う名手。興にのれば流行歌《好きだった》をカラオケで歌われることもあった。あるとき先生に「いつもどのくらいお飲みになりますか」と尋ねると「そうねー、1週間で2升ぐらいかな。毎日が“この三合の命なり”だ」と。

5、6年前だったか、ある日の夕刻、私の研究室に「どうかね…」といつも電話があり、2人で近くの“酒処”に行き、ご相伴にあずかった。飲み交

わしているうちに、ご自身の終戦後の来し方について、しみじみと懐かしそうに話を始められた。

それは、戦後の日本経済とくに地方の実情をはさみながらの実におもしろいお話で、つぎのようなエピソードも聴いた。(前述の「弔辞」の内容と重なるが、お許しいただきたい)。「復員して伊万里市の炭鉱会社に勤務していた頃だが、町の海岸に大量の石炭ガラが漂っているところがあって、人々は波に打ち寄せられた石炭ガラを集めて製塩業を営み始めた。戦後の物資不足の頃で、結構売っていたらしい。炭鉱会社にいた関係で、自分もしばしば浜の製塩所に行っていた。そこに、すでに九大に復学していた都留さんが塩を買いに来ていて知り合いになったんだ。炭鉱では組合の書記長をしていて、待遇改善などに取り組んでいたが、都留さんや中楯さんらと知り合ったことがきっかけで、また他の事情も重って会社を去り、学問の道を志して九大経済学部に進んだ」と。この思い出話が進むうちに、ふと「昔、炭鉱時代の経験をもとに九州経済調査協会の雑誌に「休鑛の山々から」という報告書を書いたが、結構な報酬だった。また、助教授昇格の論文として商大論集に「基本的矛盾とその累積機構」を書いた。この2つは自分の研究の原点だが、そのいずれも手元には見つからないんだが…」と洩らされた。翌日、早速に本学の図書館に事情を話して検索を依頼したところ、迅速に対応してくれて3、4日でその論文掲載の雑誌を入手、すぐに先生にお渡しすることができた。

先生と最後に酌み交わしたのは、亡くなられた年の3月中旬のこと。すでに前年の秋に病気の告知を受けておられたが、「今、経済学の発展に西洋宗教がどのような影響を及ぼしてきたかという問題で、何とかもう一本論文を書きたい。時間は残されているかな…」と言っておられた。間もなくして病の進行により斃れられた。(平成28年2月付記)

北古賀先生のご長男の礼二さんから色々とお話を伺いました。また、中楯先生のご長男の潔さんから先生のご葬儀での北古賀先生による「弔辞」をお寄せいただきました。心より厚く御礼申し上げます。

[編集部註記]

本会報第45号の中楯興先生追悼特集で紙幅の都合で割愛を余儀なくされた北古賀先生よりの弔辞を、今号で山内先生に紹介していただき、編集部は安堵の思いを致しました。感謝申し上げます。

リレー随想

当時の講義風景のことなど



法政大学経済学部教授

森 博美氏

1970(昭和45)年卒

1972(昭和47)年博士入

団塊の世代の第1期生というわけでもないでしょうが、この

ところ本会報では昭和41年入学組の同級生の記事が続いています。3年生の夏頃だったと思いますが、六本松での用事を済ませ九大中門で降り鹿兒島本線の先の下宿に向かっていたところ、いきなり米軍のファントム機が工事中の大型計算機センターに激突したのを覚えています。これが、原子力空母エンタープライズの佐世保寄港反対闘争なども巻き込みながら全学的な学生運動へと展開するわけですが、入学したての頃は、そんな時代が待ち受けていようとは予想もしていませんでした。余談ですが、その後教壇に立つた法政では、早稲田や明治などと同様、セクトのバリケード封鎖に大学当局がロックアウトで対抗するといった攻防が50年代半ば過ぎまで続いていました。当時は授業ができるかどうか行ってみないとわからないという状況でした。

以下では、九大時代、私の印象に残っている講義風景などを、当時の記憶を辿りつつ書かせてもらいます。

1. 教養部・学部時代の講義

現在は、新入生が大学生活に馴染めるようにとのことで、どこの大学も1年次に入門的クラス授業を設けています。当時はこういったものなどなく、語学以外はいきなり階段教室での大講義ばかりでした。5月病という言葉は当時も耳にはしましたが、大学側で何か学生の心のケアをしてくれていたわけではありません。

六本松での授業で最も印象に残っているのが、地理学の講義でした。先生は教室に入るや使い古してすっかり変色し綴り紐も切れたような大学ノートを取り出し、ひたすら読み上げて学生に一字一句書き取らせるわけです。20分ほど読んで簡単に解説してはまた読み進む。それまでの高校では考えられない授業でしたが、大学生になったのを妙に実感させた授業でした。そういえば講義のことをドイツ語で

Vorlesung、ロシア語でも читать лекцию (講義を読む) と言いますので、かつての大学での講義はきっとこういったものだったのでしょう。なお、後日談ですが、この先生がロシアの自然地理の分野で高名な方だったことを知ったのは随分後になってからのことです。いずれにせよ、板書しても学生はノートをとるでもなくiフォンでいきなりカシャとやっている昨今の授業風景とはずいぶんと違ったものでした。

そういう教養部生活も終わり2年の後期から箱崎キャンパスに進学するのですが、そこでもいくつか強く印象に残っている授業がありました。

当時の学生は履修もしていない他学部の授業などにも出ていました。とりわけ学生に人気だったのが具島兼三郎先生の政治学の授業で、私のような学生もいて大講義室はいつも超満員でした。毎度、先生の朗朗とした語り口に引き込まれ、いつの間にやら授業は終わっていました。みるとノートはいつも真っさらでした。

昨今は文科省の強い指導で年間30回の講義が義務化され、休講したら必ず補講をやらねばなりません。当時は開始のベルから15分は一種のモラトリアム的な時間とされ、学生は休講にならないかなと教室で待っているといつもぎりぎりに先生が現れ、まるで何もなかったかのように授業は始まるのでした。今なら考えられないことですが、半年間に1、2回しかない授業もありました。ここだけの話ですが、逆に1度も授業に出ずに単位をもらったこともあります。今、教室で出席を取ったり、学生側から出席を取って欲しいをいわれると、内心複雑な気分です。

そのような中で、経済の授業で今でも印象に残っているのが、岡橋保先生の貨幣論でした。テキストは『現代インフレーション論批判』で、何と1400円もしました。生協の定食が70円でしたので、今の値段だと8000円の教科書ということになります。学生は先生がインフレを作り出しているのではと陰口をたたいていました。それはともかく、テキストといっても、今本屋に並んでいるような教科書ではなく、当時先生が大阪市大の飯田繁さんなどを相手に展開されていた不換銀行券論争について、「貨幣＝金」という先生のメタリズムの主張を一冊にまとめた論文集です。ちなみに、当時は他の多くの講義も、今のように学生に親切なものなどなく、先生方は自分のその時の研究関心を授業でいきなり学生にぶつけるといったものでした。

このような高価なテキストを学生に買わせておき



大屋ゼミ合宿 久住山

ながら（もっとも買うか買わないかは学生の自由ですが）、授業はこれまた前代未聞のものでした。これも大講義室だったと思いますが、先生は一応時間通りに授業にはやっっては来るわけです。教壇に立って受講生を一通り見渡し、いきなり「何か質問はありませんか？」と聞くわけです。「どんな質問にも答えます」と。そして10分間ほど待っても学生から質問が出ないと、「それでは今日の授業はおしまい」と言ってさっさと研究室に帰ってしまう。毎回の授業がそうでした。ご存知のように最近の大学では事前に公開したシラバスに従って、また詳細な講義説明資料なども準備し、配布資料やパワーポイントを使って懇切丁寧にわかりやすい講義をするよう求められています。こちらは努力しているつもりでも、学生から思いがけず厳しい評価を受けたりすることもあります。今こんな授業などすれば、きっと響きものだと思います。

こんな授業が3回も続くと、さすがに学生側も考えるわけです。これではまずいと学生も先生や論争相手の論文を読んできては、いろいろと質問しては、先生を1分でも長く教室にとどまらせるようそれなりに努力するわけです。中には、先生よりも論争相手の方が理屈が通っているのではという学生も出てくるなど、恐らく今の学部授業では考えられないような白熱したやり取りもありました。今振り返ってみると、当時は教師も学生も大人だったような気がします。

自らが教職に就いた今、「学生に経済学は実学などではなく、即戦力はすぐ戦力外になる。」「自分で問題を発見でき、スケジューリングができ、自

らの創意工夫で解決できる能力を社会は求めている。」「自分で主体的に考え行動することこそが大切で、それができないと社会に出ても単なる指示待ち社員になるだけだ。」と、常々学生には言っています。

授業がこういう感じでしたので、教室で教わったというよりも、授業をさぼって図書館などでいろいろな古典と言われているものを勝手に読んでいました。今では経済学もすっかり制度化され、教科書やリーディングスが山ほどあります。覚えさせられることばかり多く、逆に生きた経済に学生が接する機会が少なくなっているような気がします。卒業後に待ち構えている社会には、様々な仮定の上に成り立つ華麗な定理が適用できる現実の一つもなく、全て応用問題ばかりです。この点は実業の世界も研究者の世界も同じです。

学部では統計学（大屋先生）と世界経済論（木下先生）の二つのゼミに出ていました。学部ゼミといっても学部生は数人で、ゼミによっては大学院生の方も顔を出していました。統計学の方は学部生の時から院生ゼミに出させてもらっていたのですが、院生と先生とのやり取りはさながら禅問答のようでした。ただ、学部時代にこういうことを経験する中で、自分はどうも会社勤めには向いていなさそうで、大学院にでも行こうかなと何となく考えていました。

2. 大学院でのゼミ

大学院では統計学を選びました。大学院での統計ゼミには高橋政明さん、坂本慶行さん、浜砂敬郎さん、それに藤田昌也さんや東定宣昌さんらがおられました。大屋先生のゼミはいつも午後3時頃に始まり、終わるのが10時過ぎという感じでした。夕方になると浜砂さんが研究室に備えつけの大鍋を抱えて貝塚商店街のおでん屋までひと走りするわけです。野球場の奥のフェンスがなぜか一か所壊れたまま放置されていた近道がありました。研究室のロッカーには酒や焼酎が何本も常備されていて、そのうち酒の勢いも加わり議論はとめどもなく展開する。結構そういう中で先輩方と先生あるいは院生同士のやり取りを伺っていて、それまで禅問答にしか思えていなかった事柄に不思議と得心がいくこともありました。今となってみると貴重な経験です。

ハウツウもの（分析・解析手法）を教えることはほとんどなく、ゼミの教材は専ら認識論とか哲学書でした。レーニンの『経験批判論』の輪読なども、各自が自分の問題関心に引き付けた解釈を研究室の黒板に次々に書き込み、どうにも整理がつかなくなると先生がそれを1枚の図式にまとめ上げる。

こういった感じで進んでいました。当時の大屋先生の話で今でも記憶に残っていることがあります。それは、「どんな分厚い本でも、よくまとまっている本なら、一枚の図式に表現できる。図式としてまとめられないのはどこかまだ整理ができておらず、まだまだ出来が良くない」、ということです。叙述内容を図式化してまとめる。図式化の方法やまとめ方のパターンは工夫次第で様々ですが、個々の字句にとられるのではなく全体をひとつの体系として包括的に捉える。ゼミでの認識論と図式化による情報圧縮という発想からは、論文などの内容を単にどう整理するだけでなく、もっと本質的な物事の捉え方や学問に取り組む姿勢のようなものを学んだような気がします。その後マンツーマンで読んでもらった蜷川さんの『統計学の基本問題』から得たものは、調査個票に基づく統計論という今の自分の研究のベースになっています。また、このところ10年近く取り組んでいる空間情報（GPS）を用いた政府統計の情報価値の拡張というテーマも、マイヤーなど100年近く前の統計学の古典を読み直している中で思いついたものです。

木下先生の院生ゼミには、徳永正二郎さん、皆村武一さん、田中素香さん、それに浜砂さんらがおられました。先生からは、別な意味で論文執筆の心得を学びました。先生は常々「論文は研究ノートのつもりでたくさん書きなさい。読みづらい手書きの原稿を印刷屋さんが読み易くしてくれる。それを基にあとで本格的に書き直せばいい。たくさん書く中で初めて見えてくるものもある」とおっしゃっていました。当時はワープロなどなく、原稿はすべて手書きという事情もありますが、とにかく学生時代にこのように言ってもらったことは、その後の自分の研究スタイルにとって、非常に有り難かったと思っています。量がなかなか質に転化してくれない悩みはありますが、とにかく書き続けています。

教科書通りにきちんと授業をして、理解度を試験で評価するというコースワークが今では大学院の授業の定番になっています。当時の大学院では学年や研究分野を超えた院生同士の交流も結構あり、誰がどういう理由で何に興味を持っていて、論文になるテーマとならないテーマ、今自分はこういうことを考えているがどうかとか、どこが独創的なのかを飲みながら先輩方がいろいろと話してくれるわけです。「1論文1テーマ」という論文の書き方も、こういった中で先輩方から教わりました。

最近では経済学もすっかり制度化され、論文の書き

方も定型化しないとレフェリーに評価してもらえない時勢になりました。かつて身の程知らずにも、参考文献の一つもない論文を意識的に書くよう努めたこともありました。既往研究の空白領域を探すことから始めるのではなく、現実そのものが提起している問題に直接向き合う中で何か独創的な寄与をしたいと勝手に自問していました。シュンペーターの学説史ではないですが、自らの着想の斬新さありきで、サーベイはあくまでも後追的に行う。論文とは本来そういうものと今でも個人的には思っています。

現行の人事採用システムの関係で今の院生にはどうしても制度化された業績が求められ、レフェリーが要求する定型化されたピースワイズな論文を書かざるをえないのも事実です。ただ、首尾よくテーマが確保できたら、既存の理論などにとられることなく、日本の現実が事実論理として突き付けている課題にもっと自由に取り組んで欲しいと思います。それぞれの領域で後に新たな分野を切り拓くことになる古典にあたる論文は独特の世界観と認識論を持っており、素朴に現実に向き合いそこに規則性を見出そうとする意欲と独創性が荒削りな形で表現されています。個人的には海外の先行研究のデータだけを差し替えただけの洗練された最先端の論文ではなく、こういった論文が共通に持つ現実と対峙する意欲と開拓者としての息吹のようなものについて惹かれます。それも学部生時代に講義をさぼって読んだ古典や学部・院生時代に受けたこのような授業が少なからず影響しているのかも知れません。

その意味で学生を大人扱いしてくれ、自分で考え、オリジナリティにつながる感性を磨くことの大切さを教えてくれた当時の先生方には今も感謝しています。

リレー随想

九経調創立70周年を迎えて



公益財団法人九州経済調査協会 理事長

高木 直人氏

1982(昭和57)年卒

2007(平成19)年博士入

私は、九大経済学部を卒業す

ると、恩師・木下悦二先生のご紹介で、九州経済調査協会（九経調）という調査研究機関に就職しました。当時、シンクタンクという言葉はあまり使われておらず、文部省認可の学術調査機関という言い方をよくしていました。九経調には九大経済学部出身の先輩方も多く、九経調に入社してからも九大経済学部の先生方と九州各地に出張し一緒に調査したり、お酒を酌み交わしながらよく議論をしたものです。

それから30年余りが経ち、昨年、私は九経調の理事長を拝命しました。そして、今年、九経調は創立70周年という節目の年を迎えます。そこで、九経調の歴史を簡単に紹介させていただくと同時に、九州のシンクタンクとして今後何が求められるかについて、紙面をお借りし、私見を述べさせてもらいたいと思います。

九経調はユニークな歴史をもっています。九経調は、九州・山口の調査研究を通じて、地域経済の発展に寄与することを目的として、産学官の連携のもと1946年に設立されました。戦後、海外引揚者と復員軍人139万人が博多港に上陸したといわれていますが、そのなかには日本で最初のシンクタンクといわれる満鉄調査部の出身者も含まれていました。九経調は波多野鼎九大教授、野田俊作九州地方行政事務局長（兼福岡県知事）、門川暴日銀福岡支店長が発起人となり、博多港に引き揚げてこられた満鉄調査部出身の役職員に支えられて、地方調査機関としてスタートしました。初代理事長の松岡瑞雄氏は満鉄調査部出身、二代目理事長の濱正雄氏も満鉄出身です。戦後すぐは満鉄調査部関係者が設立した調査機関は全国各地にあったということですが、今ではこのような歴史をもつシンクタンクは稀です。このような経緯から、九経調は設立当初から、満鉄調査部のDNAを引き継ぎ、「精神論ではなく統計やデータに基づいた調査」や「足でかせぐ調査」を信条とする調査マン気質を誇りとしてきました。

ちなみに、九州を代表する経済団体である九州経済連合会（九経連）と福岡経済同友会も九経調と深いかわりをもちながら発足しました。福岡経済同友会は、九経調発足の翌年、1947年に発足、発足時から事務局を九経調におき、それ以来九経調と同友会は車の両輪の関係が続いています。また、九経連は、九経調が発足して15年後の1961年に設立されましたが、設立に当たっては九経調の役職員も走り回ったと聞いています。2代目理事長の濱正雄氏は、九経連の初代専務理事となり、九経調の職員も何人か九経連に移りました。

九経調は、現在、九州の企業、大学、自治体など約580会員の皆さんに支えていただきながら、九州経済白書や九州経済調査月報などで発表する自主研究、国・県・市等からの受託研究など年間約100本の調査研究を行っています。また、4年前の2012年には、電気ビル共創館に移転し、BIZCOLIというビジネスライブラリーも開館し、そこを中心に年間約80回にのぼる講演会やセミナー等も開催しています。2013年には、公益法人改革に対応し、公益財団法人に移行しました。

以上のように、九経調は九州の皆さんに支えていただきながら、地道に活動を続けてきたわけですが、次に、30年後を見据え、九州のシンクタンクとして求められる役割は何かについて述べてみたいと思います。

私は変わらぬ役割と今後新たに重要性を増す役割があるのではないかと思います。変わらぬ役割とは、九州において産業や地域のイノベーションを引き起こす役割です。実際、九経調と九州経済の歴史を振り返るとそういう役割を果たしてきたように思います。

産業のイノベーションについては、1960年代に自動車産業の先駆的な調査を行い、当時、九州には根付かない、不可能だと考えられていた自動車産業の立地の実現に貢献しました。また、2000年前後には半導体産業の調査を数多く手がけ、半導体産業クラスターの形成につながりました。半導体実装国際ワークショップMAPも2001年から毎年開催、九州の半導体関連地場企業の国際化を推進しました。地域のイノベーションについては、2000年代に入り、道州制の研究に集中的に取り組み、九州経済連合会や九州経済同友会とともに、道州制の九州モデルづくりに取り組みました。

それでは、新たな役割とは何でしょうか。九州を世界の地域発展のモデルにするような役割がでてくるのではないかと考えています。世界には英国のスコットランドやスペインのカタルーニャ州など自立意識が強く、輝いている地域があります。九州もそのような地域をめざしてはどうかと常々考えています。

そのためには、まずグローバルに情報を収集・分析し、世界に情報を発信する力を高める必要があります。世界で何が起きているか情報を収集し、九州のおかれた状況を正確に分析すること、世界の都市・地域の先進的な事例に精通すること、九州の情報を世界に発信して、九州のブランド価値を高めること

等が求められます。

もうひとつは、グローバルな視野で考えながら、九州の視点で行動していくことが大事です。国内事情に精通した上で、アジアに打って出る、行動に移すことが重要になってきます。例えば、インバウンド観光や農産物輸出、さらに将来的には医療福祉等で、九州とアジアを結びつけていかなければいけません。これまでも、九経調は韓国の地方シンクタンクと日韓海峡圏研究機関協議会を通じて22年間交流を続けています。2014年には上海社会科学院ともMOUを提携しました。しかし、これだけでは不十分です。

新たな役割を果たすには、九経調単独で取り組むというより、九州大学との連携を強化し、九経調の可能性を広げていきたいと考えています。九州大学は世界トップレベルの知を集めた研究を、世界・アジアの視点、長期的な視点で行う。まさにこれは欧米、ロシア等の政治経済情勢を研究していた満鉄調査部が行っていたことです。また、九経調は九州に軸足をおいて短期中期的な視点で地域に根ざした実践的な研究をする。これも満州のすみずみまで足でかせいで調査した満鉄調査部と似たところがあります。九州大学と九経調の強みを生かし、満鉄調査部のような研究機関をめざしたいというのが、私の夢です。

今後とも九大経済学部、九大経済学部同窓会の皆様のご支援ご協力を賜れば幸甚に存じます。

リレー随想

宇宙開発と経済工学



JAXA
荒木 秀二氏
1987(昭和62)年卒

今回のリレー随想は、高校、大学と同級生だった宮崎誠二さんから紹介いただきました。

宮崎さんとは、数年前の東京での同窓会で卒業後20数年ぶりにお会いして近況をお話ししました。その時に私が宇宙航空研究開発機構（JAXA）に勤めている話をしたところ随分変わったところに就職したという印象を持たれたようで、今回の紹介につ

なりました。確かに経済学部を出てエンジニアとして仕事をしているために、変わった経歴のように見えますので、今の仕事に進んだきっかけや大学で学んだことと仕事の関係について、今回の機会を活用して少しお話ししたいと思います。

まずは簡単に経歴を紹介いたします。私は昭和58年に経済学部経済工学科に入学し、経済工学科では岡部鐵男先生の下で管理工学を専攻しました。学部卒業後の昭和62年に当時の宇宙開発事業団（NASDA）に入社。入社後は人工衛星をロケットから切り離された後所定の軌道に移動させたり、衛星の位置を一定の範囲に保持する業務を2年ほど行った後、スペースシャトルを利用した宇宙実験計画「ふわっと'92」の毛利、向井、土井宇宙飛行士の支援や、本格的な宇宙飛行士の選抜や訓練の計画、アニメやドキュメンタリー番組でご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、宇宙飛行士の候補者を閉じ込め適性を調べる訓練施設などの計画立案を担当しました。また、先ほどの3名の宇宙飛行士に続く宇宙飛行士として選抜された若田光一飛行士（偶然ですが、大学では同期入学となります。）の訓練などの計画も担当しました。その後はスペースシャトルや国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」を利用した宇宙実験の計画調整業務、広報業務、欧州地域との宇宙開発に関する協力調整業務を経て、現在は宇宙ミッションに関する安全・信頼性業務の企画推進を担っています。

NASDAに就職しようと思ったきっかけは、学部の就職資料室でたまたまNASDAのパンフレットを発見したことでした。当時はバブルが膨らみつつある時期で、周りの同級生の多くは金融関係に就職しようとしていました。私は元々機械や技術に興味が高く、当時国際的に評価が高まっていた自動車メーカーなどを第一志望で考えていました。おそらく事務系職員の募集のために経済学部にもパンフレットが置いてあったのだと思います。私は日本でロケットを打ち上げていたことはニュースでも知っていましたが、パンフレットを見て初めてNASDAという組織を認識し、そこが募集する技術系職員に経営工学分野が求められているということを知り、もしかしたら大学で学んだことが活かせるかも、と思うようになりました。文系学部ではあるものの技術系職員の募集に応募したところ、この分野からの応募が珍しかったようで運よく就職することができました。当時のNASDAはまだ知名度も低かったので、応募者数が多くなかったことも幸

いしたのだと思います。

管理工学と宇宙開発の関係ですが、管理工学で取り扱っているオペレーションズリサーチの各種手法は米国の軍で発展してきたもので、第二次世界大戦後の軍事技術開発や宇宙開発競争で発展、実用化されてきたものです。日本における実用ロケットや衛星の開発は米国からの技術導入から始まっており、これらの手法についても同様に導入されてきました。具体的には、大型プロジェクトにおける段階的な開発・検証プロセス、プロジェクトの進行管理、信頼性や品質の管理手法や、人工衛星などの設計や運用の最適条件を決める際に、オペレーションズリサーチの手法が多く用いられます。

私のこれまでの仕事では、管理工学の専門的な知識を掘り下げていくというより、業務に関連する幅広い分野での知識を勉強しつつ、全体をまとめる業務が多かったように思います。例えば、宇宙飛行士関連の業務では、宇宙での人体の医学的な変化や、心理学的な問題に関する対応策のための研究施設の整備計画を専門家の方と一緒に検討しました。また宇宙の無重力を利用した実験をまとめる業務では、生物学、医学、物理学、材料工学の研究者の方と一緒に仕事をしたり、宇宙ステーションをより広い分野の方に使ってもらうために、芸術家や哲学の方のご意見を伺いに行ったこともありました。これらの仕事の中でも限られたリソースの中で最大に効果を出していくことが必要であり、管理工学で学んだ視点や考え方が役に立つ場面は数多くありました。

現在は信頼性や品質管理などが業務となっており、卒業後30年近くしてから大学で学んだ知識を活かせる仕事をしています。50歳を過ぎて固くなって知識が入り難くなった頭で勉強をやり直している状況です。

最後に宇宙活動が経済学や経営学とどの様な関係になっていくのか考えてみたいと思います。

私が入社したころは、米国から導入した技術を如何に国産化していくのか、宇宙先進国に追い付いていくのかという、国家主導の技術開発の時代でした。それから30年が経とうとしている現在では、日本は技術的には全てではないですが世界のトップ集団に入ってきているとともに、科学技術政策の一環としての活動という位置付けだけでなく重要な社会インフラとして認知されてきています。今後の宇宙活動を通じて社会活動にどの様に貢献していくのか、衛星打ち上げビジネスや人工衛星利用ビジネスの中でいかに日本の産業界がシェアを広げて行くのか、と

いう時代になりました。

また、世界を見ると米国では従来の軍需・航空宇宙産業界ではなく、IT業界などの異業種から宇宙事業に参入し、個人向けの宇宙旅行や何百機もの人工衛星を使って世界中にインターネット接続の実現を目指すなど新しいサービス提供という動きがあります。

このようにこれまでとは異なる宇宙事業の広がりが出てきていますので、今後は宇宙事業が経済学・経営学などでの産業分析や企業分析の研究分野の対象にもなってくると思います。より多くの方が宇宙活動に興味を持ち、事業そのものや研究として参加していく時代が来るようになることを期待して、随想を閉めたいと思います。

リレー随想

何か良い感じの人生



一般社団法人日本珠算連盟

大塚(旧姓 井上) 明子氏

2004(平成16)年卒

今回は、このような寄稿の機会をいただきうれしく思っております。この機会に少し人生を振り返ってみようと思います。

私は地元の福岡高校を卒業後、九州大学経済学部に入學するというありがちなコースをたどり、特に目標もなく学生生活を送っていました。具体的な目



2002年夏 清水ゼミで吉岐へ旅行

標もないまま、簿記検定やTOEICを受け、適当に勉強し、空いた時間にアルバイトをするといったような感じでした。

そんな中で、2年生のころから清水一史先生のゼミに所属し、週に1回のゼミの時だけは、「わたし、勉強しているな」という実感に浸っていたように思います。ゼミでは「キャッチアップ型工業化論」(末広昭、2000年、名古屋大学出版会)や「グローバル資本主義」(ロバート・ギルビン、2001年、東洋経済新報社)などを教材に、ASEAN経済や発展途上国の工業化について、活発な議論を交わしました。しかし、予習不足でおかしな質問をしたり居眠りをしたり遅刻したりと、清水先生には大変迷惑をおかけしていたことも事実です。

先日、経済学部東京同窓会で清水先生にお会いしたとき、周りのゼミ生の活躍を聞きながら、「仕事なんてめんどくさいっすよねー」と口走ってしまった私に、清水先生は「井上さんは相変わらずだなあ〜」とおっしゃられ、当時から成長していない自分に赤面したことも良い思い出です。

大学卒業後は、在学中から続けていた公認会計士の勉強のため、福岡市内の会計事務所に入所しました。入所したばかりの頃は、実務経験が全くなく、ビジネス用語や申告書類の書き方もわからず、右往左往する毎日でした。幸いにも周りの方々に恵まれ、何とか一人でクライアントを訪問できるようになり、会社経営や税務関係の相談を受けたり、税務申告書類を作成したりと、忙しく働いておりました。

その後、27歳で九大の同級生と結婚して上京し、2年間専業主婦生活を満喫した後、働くこととなりました。一般社団法人日本珠算連盟という会社を紹介していただき、初めは非正規でゆるーく働こうかな、と思っていたのですが、何故か社員となってしまい今に至ります。弊社は日本商工会議所の関係団体で、珠算の普及と振興を目的とし、珠算検定事業の施行を主として行っている団体です。珠算検定受験者数は昭和56年をピークにしばらく減少傾向が続いていましたが、平成17年度を底に近年は年々受験者数が増加しています。そろばんは「注意深く観察する力」「イメージやひらめきの力」「記憶する力」「集中する力」「情報を処理する力」「速く聴き、速く読む力」といった能力を向上させると言われていて、子どもの習い事として人気があります。また、最近では高齢者向けの教室も増えてきており、脳トレの一環として学ばれる方も増えてきています。今後も珠算を学ぶ方が増えるよう励んでいきたいと思っております。



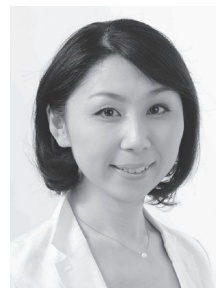
2000年夏 L1-10の友達と箱崎浜で花火

こうやって振り返ってみると、今まであまり先のことを考えず適当に楽しい選択だけをしてきたのに、何か良い感じの人生を送れているかな、と思えてきました。これからも適当に頑張っていきたいと思えます。

リレー随想

大学～社会人生活を

振り返って



office IDEMIO 代表
青柳(旧姓 井手) 未央氏
2004(平成16)年卒
2006(平成18)年修士修了

平成18年に九州大学大学院修士課程を卒業した青柳(旧姓井手)未央と申します。

この度は同窓会でのご縁で、このような機会を頂き感謝申し上げます。

1. 現在の私

現在、私はキャリアカウンセラーのスキルをベースに人材コンサルタントとして活動しています。企業や行政事業におけるキャリアデザイン研修や、新入社員研修、また人事代行として採用活動における面接から内定時期のサポート、新入社員研修を一貫して担っています。今後も多くの企業の成長に「人材」という観点でサポートする立場でありたいと考

えています。

2. 大学時代

私は理系職での就職のイメージが湧かなかったことから文系を選択し、文系の中で就職の選択肢が多そう…といった今思えば恥ずかしい理由で経済学部を選択しました。あの頃は、まさか私がキャリアコンサルタントになるとは想像もせず、できることなら高校時代までタイムスリップして一緒に将来を考え直したいと思います。

大学時代は、サークルもアルバイトも“夢中”で寝る間も惜しんで楽しんでいました。勉学では、第二外国語で韓国語だったことが縁となり、韓国が、大学、大学院を通じて“夢中”になるテーマになりました。

さらに運が良いことに、九州大学の経済学部には、日本国内でも数名しかいない韓国経済の研究者である深川博史先生が所属されていたので、ゼミは迷わず深川ゼミをメインにサブゼミとして清水一史教授にお世話になりました。大学院時代は六本松キャンパスの深川先生の研究室で美味しいコーヒーを頂きながら、就職の相談をしたり、論文指導を受けたりした日々は今思えば贅沢な時間でした。あの時の経験が、私が現在身を置くキャリアの世界で、理論と実践を行き来する中で活かしています。

3. 社会人での経験

卒業後は、NTTコムウェア株式会社というシステム開発を事業軸とする企業へ就職しました。システム開発では、プロジェクトメンバーと共に一つのシステムを作るという同じゴールを目指す点や、お客様の曖昧な要望を明確な形にする点に面白みを感じ、日々深夜まで“夢中”で働きました。そこでは、今でも社会人として尊敬する師とも出会い、周りのメンバーにも大変恵まれたこともあり、社会人の土台となる経験になりました。

そして入社して3年後、小さなユニットでのリーダーを務めるようになった頃に双子を妊娠しました。出産前は切迫早産で長期入院し、お腹が大きくなりすぎて歩くのも呼吸も苦しく、産後は夜泣きで3ヶ月までほとんど眠れない日々が続きましたが、子供たちの健やかな成長を支えとして母親として成長させてもらいました。

しかし、復職後は補佐的業務を担当するようになり、「ワーキングマザー」ではなく職業人として自分のキャリアに焦りと不安を覚えるようになりました。そんな焦りから、時短勤務を半年で解除し、慌ただしく保育園に最後に滑り込む日々…。ただ次第



卒業記念祝賀会で深川博史先生と学部ゼミの後輩と

に、子供へも預ける時間が長いことに申し訳なさを感、会社へも貢献度の低さに申し訳なくなり、母として仕事人としての自分を認めることができず精神的に辛くなっていきました。

今思えば、子供たちも保育園の延長時間に他学年のお友達と縦のコミュニケーションに慣れて上下関係をうまく築けるようになり、よい面もあったのですが、そう考えることもできなくなっていました。

そして悩みすぎた結果、キャリアに対する考え方を学んでみよう、キャリアカウンセラーの資格を取得するに至りました。自分自身悩んでいたため、その学びは面白く“夢中”だったのを覚えています。その資格取得がきっかけで、キャリアカウンセラーとしての人脈が広がり、今までと見える景色が大きく変わり始め、その道へとキャリアチェンジを考えるようになりました。結果的に、資格取得から2年半後、私はNTTコムウェアを退職して独立して起業することを選択したのです。

4. 独立後

独立後は組織に所属せず、個人事業主としての働き方を選んでいきます。

仕事も時間も、自分で選択しながら、キャリアを組立て、育児との両立をする日々は、まさに自分自身が研究対象です。また、いろんな方との出会いや多様な案件は緊張感と充実感があると共に、人材分野に関わるものの責任として絶えず自己成長をする必要性も感じています。まさに“夢中”で仕事と向き合っています。

振り返ると、私にとって“夢中”になれることは、そのステージでの人生の満足度において重要なキーワードです。また“夢中”で突き進んだ先に、新たなステージが開けてきました。今後も自分のキャリアをデザインし、時には流れに乗ってキャリアを切

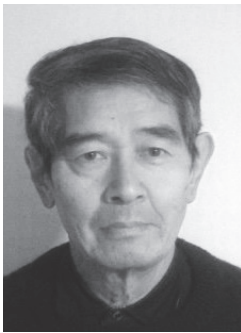
り開いていきます。

最後に、独立には夫と息子たちの理解と協力が欠かせませんでした。私の意思を尊重し、常に応援し

てくれる家族に感謝をもって、今後も母として、妻として、職業人として、そして自分自身も大切にしたいと思っています。

人物往来～退官

アナログ人間に徹して



経済学研究院教授

田北 廣道氏

[専門分野] 西洋経済史

1973(昭和48)年卒

1975(昭和50)年博士入

助手時代の2年間を除けば、1991年4月に着任してから四半世紀にわたり九州大学にお世話になりました。思い起こせば、着任早々に浮上したキャンパス移転問題、六本松の教養部解体、3年次編入学制度の導入、大学院重点化、QBSの開設、伊都キャンパス移転の開始など、教育・研究体制の目まぐるしい変化に翻弄されっ放しの25年間でした。

私は機械音痴で融通の利かない人間ですから、多くの先生方と学生諸氏にも多大な迷惑をおかけしたと存じます。学部の講義でも、市場システム・ネットワーク、プロト工業化、世界システム、環境史と時代の要請に応じた内容を加えつつお話ししたつもりですが、情報過多の講義資料を配付し、早口の講義で学生諸氏を悩ませたことと思います。これはアナログ人間の弊害かもしれません。また、研究では、日本人好みの「この道一筋」、「苦節30年」といった形で、一つの専門領域に打ち込まずに、中世の同業組合、中世都市・市場システム、プロト工業化、19-20世紀ドイツ環境史、はたまた最近の日欧エネルギー・環境政策の比較と、遍歴職人よろしく渡り歩きました。その間、今は亡き恩師、森本芳樹先生と違って多くの専門研究者を世に送ることもできず、恥ずかしい限りです。

ただ、恩師が常々おっしゃっていた「研究史の到達状況を踏まえた実証研究」とのお言葉だけは、比較的忠実に守ってきたように思います。その時点で手がけているテーマにかかわらず、関連する文献・論文を渉猟し、とくにその分野の大家の著した文献については注まで丹念に読み込んで、関係する学説と依拠する史料を確認し、同時に入手可能な文献・論文・史料は取り寄せて講読してノートをとる。最後に、頭の中にしまい込めるだけの情報量に圧縮するために一橋式カードにまとめる。本年度の大学院の「経済学方法論」に関するオムニバス講義の中でも、その話をしました。生まれながらにデジタル人間である一部の院生諸氏からは、時代遅れとの意見も出ましたが、私は、それには賛同できません。ある分野の開拓者や大家の地位にある偉大な先学の思考の足跡を辿りながら、彼らの言いたいことを基礎資料を含めて正確に理解する。あるいは、一流の研究者と対話をし、新たな史料や観点を踏まえながら、一歩ずつ自分の世界を築き上げていくためには、今でも最良の方法だと信じています。また、様々な分野の大家の思考に触れることで、ある問題に取り組むための多様な接近方法と、それぞれのもつ特徴も的確に把握できるようになり、「井のなかの蛙」的な偏狭な理屈にしがみつくと、はるかに柔軟で複眼的な展望が開けてきます。これが足もとの定まらないアナログ人間である私が学んだ教訓です。一度試してみれば、かつて西南学派の名を博した本学部の誇りが蘇ってくるかもしれません。グローバル化や少子化が急速に進むなかで、九州大学も一大転換期に突入しています。文理横断的な新学部構想もあるようですが、化学工業をめぐる環境史に取り組んできた人間の目から見れば、よほど上手にカリキュラム設計をしないと教育の実を挙げるのは難しいよ

うに思われます。将来、旧7帝大の一つとして九州大学が教育・研究双方で、これまで以上に光り輝くことを祈念します。最後に、私を支えてくださった

多数の大学関係者の皆様に謝意を表して筆を措き、研究室を去ることにします。

九州大学経済学部を 「卒業」するにあたって



経済学研究院教授

稲富 信博氏

[専門分野]国際資本市場分析

1973(昭和48)年卒

1973年3月に九州大学経済学部を卒業したのですが、各々8年の、東京での院生時代と、広島での新任教員時代を経て、1989年に九大教養部に赴任しました。その後、教養部廃止に伴って経済学部へ転任し、「証券市場」を担当することになりました。

それが1994年ですから、22年経った今年の3月に定年退職を迎え、ようやく経済学部を「卒業」することになります。ですから、私の経済学部での思い出は、学生時代と教員時代に分けられますが、研究生生活を送ろうと決心した4年間の学生時代が当然深く心に残っています。

「存在が意識を決定する」といわれますが、私の半生を決定づけたのは、当時の社会状況と同級生であったと思います。安田講堂の封鎖解除の様子を横目で見ながら受験勉強をしていた青年にとって、大学に入学したら一般教養として『資本論』と『帝国主義論』を読破しようと思いついたのは普通のことと感じました。マルクス主義経済学の入門書・概説書を読むことから初めて、十分に理解できないまま『共産党宣言』『経済学批判』『資本論』を読み続けていました。直ぐさま、マルクスの論理展開や壮大な歴史観に圧倒されましたが、マルクス主義経済学が強調するマルクスの無謬性には疑問に感じましたし、革命後に理想の社会が打ち立てられるというキリスト教的世界観は納得できないものでした。それよりもインド哲学や、カミュの不条理な世界観が今

でも私の性に合っています。

そのような時に、通学路が同じであった小倉高校出身の同級生が宇野理論を紹介してくれました。当時入手可能であった『経済原論』と『経済政策論』を読み始め、ロブストな論理展開と批判的に読み・考える姿勢に魅了されました。それから、法学部の友人を含めて4人で筑摩書房の『資本論研究』を素材に自主研究会を始めました。どの程度それが続いたかは記憶にありませんが、宇野原論の章別編成がヘーゲル『論理学』に拠っているなどの議論をしたことを思い出します。また、宇野理論を批判している世界資本主義論も読んでいましたので、「どんな理論も批判可能であり、そうした研究の仕事を天職にするのも悪くない」と考えるようになり、それならば宇野理論が学べる東京大学か東北大学の大学院に進もうと、2年生の頃に決心しました。

私に研究者としての能力があるのか、経済的に院生の生活が可能か、などは深く考えないまま、無謀な将来決定をしたものだと回想します。無事に東京大学に進学できましたが、それからは御多分に漏れず順風満帆と行かず、当時、東京で働いていた福岡高校出身の同級生から元気をもらったものです。

大学院時代に、研究分野は理論から歴史に興味に移り、イギリスの資本市場史がライフ・ワークになりました。この研究を今まで続けられたのも、家族はもちろんのこと、上記の友人や、自ら大学を退学した級友など、私に関わったすべての方々支えと刺激があったとの思いが、退職が近づくにつれて強くなりました。奇しくも、1973年に卒業証書を受け取ったのは101番教室でしたが、私の最後の講義も同じ教室でした。講義終了後教室に暫し佇み、学生時代からの来し方行き末を考え、箱崎キャンパスに別れを告げると同時に、今後は、残してきた多くの研究課題を前に「まだまだもがいてみよう」と気持ち新たにしました。

最後に、九州大学経済学部およびに経済学部同窓会に深く感謝申し上げます。

海と波と船



経済学研究院教授

吉田 基樹氏

[専門分野] 知的財産管理

着任以来11年が瞬く間に過ぎました。着任時に、筑紫の

地において教育、研究に加えゴルフ運動も行い、文武両道に励みたいと考えましたが、残念乍ら、いそがしさの余り文のみに終始しました。筑紫の美しい風土も探訪できず、ゴルフも冬眠状態でした。

扱、私は修士課程及び学部で技術経営関連の科目を受持ちましたが、専門を煎じ詰めると、船舶流体力学及びロジスティクスになります。所謂船大工、更には船乗り、英語でseamanと烏訶がましい乍ら自称しています。

曾て英国はBritannia rules the wavesと謳われる国でした。我国も同様に四方の海に囲まれ、海洋を制しないと発展余地のない海洋国と位置付けられる島国です。しかし残念乍ら、長年海洋民族の覇気に満たされ続けたとは言えません。唯seamanの間には、我国二千七百年近くの歴史において、平氏の時代のみ例外的に、我国が世界への発展を指向した時

期が存在したと言う口伝があります。即ち、平清盛、戦国の和寇、八幡船から平信長の時代です。これらは皆な筑紫国就中博多が、貿易など海外飛躍の主な拠点となっています。翻って、我国の現状は如何でしょうか。海洋立国の掛声のみ大きく、実態は島国の内に籠って収縮状態ではありませんか。例えば、我国資源エネルギー食料通商の99.7重量%を担う外航船の船員数は、かつての五万名以上が今は二千余名と激減しています。このように進取の気概が寒々とした状態で、真に一国の経営、経世済民が成立つと言えましょうか。

建武の頃、足利尊氏は都おちして九州へ逃れ、芦屋浦へ上陸後、一路進んで尊氏方二千余名の寡勢が香椎宮の高地に拠り、筥崎宮の低地に布陣した宮方勢数万騎を多々良浜合戦で打破りました。この箱崎の地です。この後、尊氏は水陸両軍を糾合し、僅か数か月で再び大挙上洛を果しました。これを尊氏の筑紫びらきと称するそうです。斯の如く、古来筑紫国は、力を蓄え捲土重来を図ると共に、海と世界に向けた開拓精神を育む絶好の地ではないでしょうか。

この筑紫国の箱崎多々良浜で学問を志し、雲を得るまで淵に潜んで文武の修行に励んだ九州の健児が、筑紫びらきに倣い、抜山蓋世の気概と洞察と創見とを以て我国の沈滞を打破り、世界の海も空も宇宙も制し、平氏の時代の如く海外に雄飛されることを期待し、かつ願ってやみません。

中国人民大学との 交流の思い出



経済学研究院教授

川波 洋一氏

[専門分野] 国際金融

1976(昭和51)年卒

1978(昭和53)年博士入

平成28年3月31日をもって九州大学を退職することになりました。学生時代から通算すると40年の長きにわ

たって九州大学にお世話になったことになり、文字通り人生の大半をこの大学とともに過ごした訳であります。その間、多くの先生、同僚の方々、職員の方々、学生諸君との素晴らしい出会いを得、大変有意義な時間を過ごさせていただいたことに心からお礼を申し上げます次第です。

退職にあたって、年明けから少しずつ研究室の整理を始め、論文のコピーや新聞の切り抜き、自ら執筆した原稿や様々な方々との手紙や写真、学会の事務記録などを整理しておりましたが、そのなかに一枚の色紙を発見しました。それは中国人民大学の副教授であった于学儒先生が「波」という一字を毛筆で私のために認めてくださったものでした。おそらく私が助教授になって2年目のことですから、時は

昭和59年（1984年）、場所は深町郁彌名誉教授のお宅でのことであつたらうと思われまゝ。先生は、私の名前の一字をひたひたと波のように進むという意味に解釈し、そのように今後がんばってくださいという思いを込めて認めましたと説明しておられたのを今も思い出すことができます。古ぼけた書類のなかにその色紙を発見し、しばしその後の中国人民大学との交流の思い出に耽った次第です。

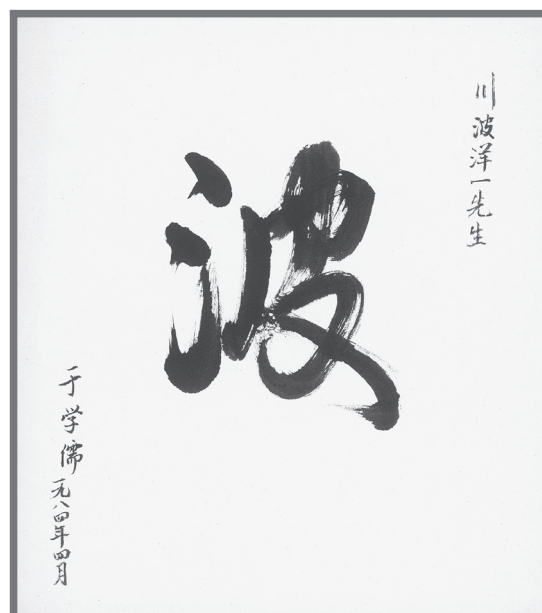
ところで、中国人民大学は、社会科学の分野では中国のトップに位置する名門大学ですが、その人民大がなぜ九州大学に交流の話を持ちかけてきたのかという点については、あまり詳らかにされていなくとも思われます。両大学の交流にとって重要なきっかけを与えられたのは東京大学経済学部の伊藤誠名誉教授であろうと思われまゝ。先の于先生は日本の代表的マルクス経済学者であつた伊藤教授に交流の相手になりうる日本の大学について相談され、伊藤先生が九大の名前をあげられたのではないかと思われまゝ。伊藤先生から于先生のお名前を直接伺つたこともあり、いつの日か伊藤先生にこのことを確かめてみたいと思つている次第です。

人民大学と九大経済との交流のきっかけを作つてくださった于先生と伊藤先生のことについては、われわれの記憶のなかにとどめておいて良いのではないかと思つる次第です。

昭和58年には、九州大学経済学部と中国人民大学との学術交流協定が締結され、全国的にもまた九州大学においてもさきがけとなるような国際交流が始まつたのでした。その後約10年間にわたつて大変緊

密な学術交流が行われ、中国人民大学からは衛興華、成保良といった著名な学者が来学し、講演会や研究会が開催されました。その様子は、この経済学部同窓会報の記事においても語られている次第です。しかし、平成4～5年（1992～3年）あたりから次第に交流の頻度は落ち、本当に細々とした行き来になつてしまつた時期もありました。それからまた数年が経ち、中国人民大学経済学院からわが経済学部との間で、共同教育プログラム（いわゆるダブルディグリー・プログラム）を始めませんかとの提案がなされたのは、平成19年（2007年）4月のことでした。私は、研究院長に就任して早々のことでしたが、人民大の紀宝成学長並びに国際交流担当の唐教授とお会いし、当時の柳原副学長も交えてこのプログラムの実現可能性や内容について協議いたしました。このことが、人民大学との交流を再興し、拡大させる契機となりました。その後、人民大学経済学院の楊院長との信頼関係も構築され、共同教育プログラムは着実な成果をあげてまいりました。受入数と派遣数との間に圧倒的なアンバランスがあることが、今後克服されなければならない課題です。

確かに学生交流数には不均衡がありますが、少なくとも九大で学んだ人民大生はその後中国国内の重要な機関においてポジションを得、大いに活躍しているようです。今後九大の学生も人民大学で学び、活躍の場を世界に広げてほしいと願ひいたします。于学儒先生の認めてくださった色紙を見ながら、そのような感慨に耽つた次第です。



経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。
本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

- 理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名
- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
 - 3 役員の内任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
 - 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。
(2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
(3) 理事については別に規定する。
(4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。
(5) 監事は本会の会計を監査する。
(6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

- 2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
- 3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

- 2 通常総会では次の事項を承認する。
 - (1) 予算および決算に関する事項
 - (2) 役員を選任、会則の制定および変更に関する事項
 - (3) その他本会の運営に関する事項
- 3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

- 2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。

なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)
 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)
 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)
 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)
 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)
 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)
 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)
 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)
 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)
 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)
 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- | | | |
|-------|------|------------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 〃 | 3分割 15,000円×3回 (1.5年間で納入完了) |
| ③ | 〃 | 6分割 7,500円×6回 (3年間で納入完了) |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ (11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年（2006年）3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成28年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がありましたら、同窓会事務局までお知らせ下さい。



九州大学経済学部同窓会事務局 （開室：平日の月・火・木・金 10時～17時）

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学経済学部内

TEL 092-642-2442 / FAX 092-642-2348 / E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。
 適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。